

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

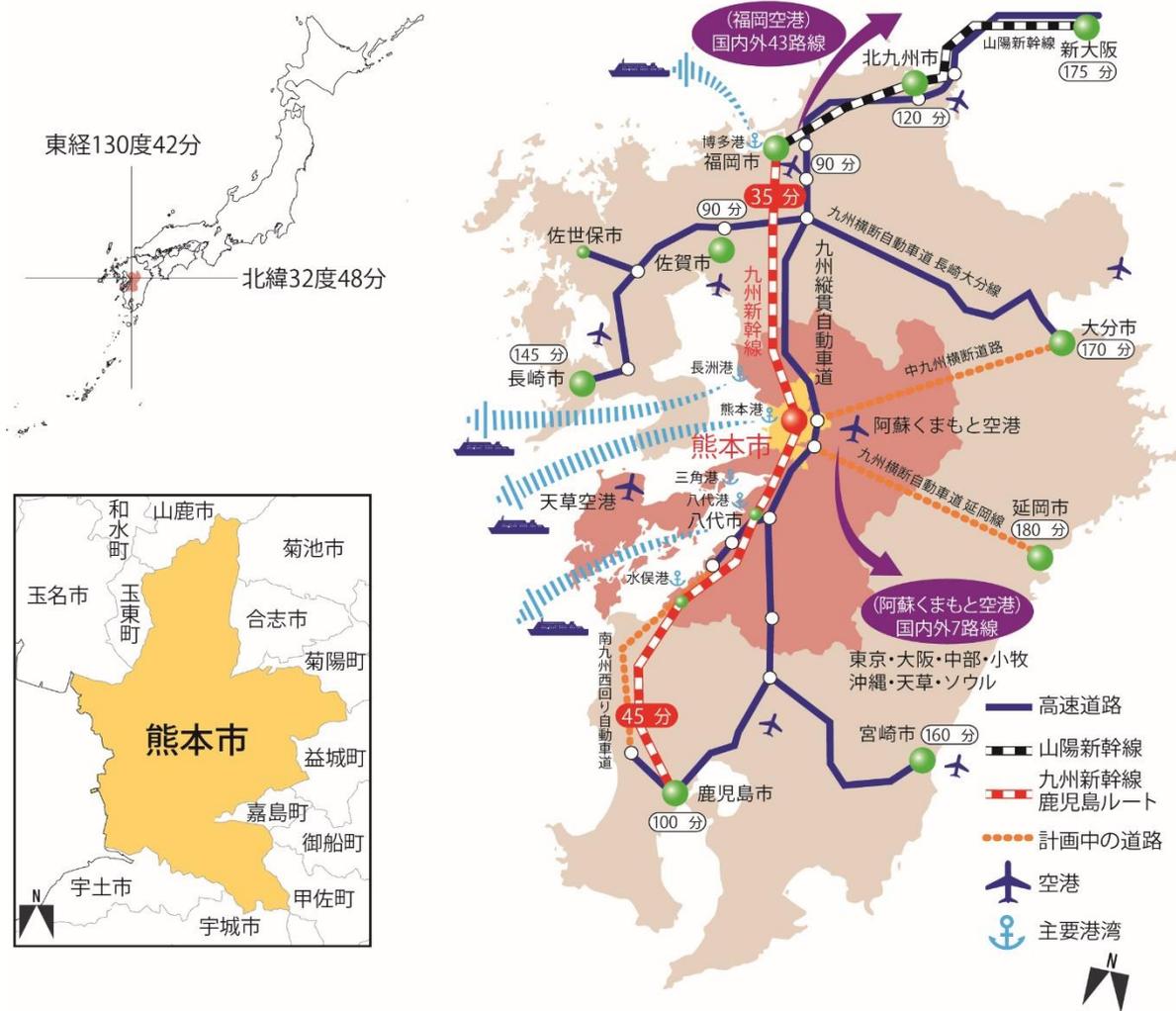
1. 自然的環境

(1) 位置

本市は、九州の中央、熊本県の西北部、東経130度42分・北緯32度48分に位置し、市域の直線距離は東西約24.37km、南北約35.55kmに及び、面積は390.32km²の広さを有している。

本市に隣接する市町は12あり、^{たまな}玉名市、^{ぎよくとうまち}玉東町、^{やまが}山鹿市、^{きくち}菊池市、^{こうし}合志市、^{きくようまち}菊陽町、^{ましきまち}益城町、^{かしまち}嘉島町、^{みふねまち}御船町、^{こうさまち}甲佐町、^{うき}宇城市、^{うと}宇土市がある。

九州各県へ通じる高速道路や一般道、九州新幹線などの広域交通の要衝であるとともに、九州の中核をなす政令指定都市であり、九州各拠点都市をつなぐ連携の要として重要な役割を担っている。

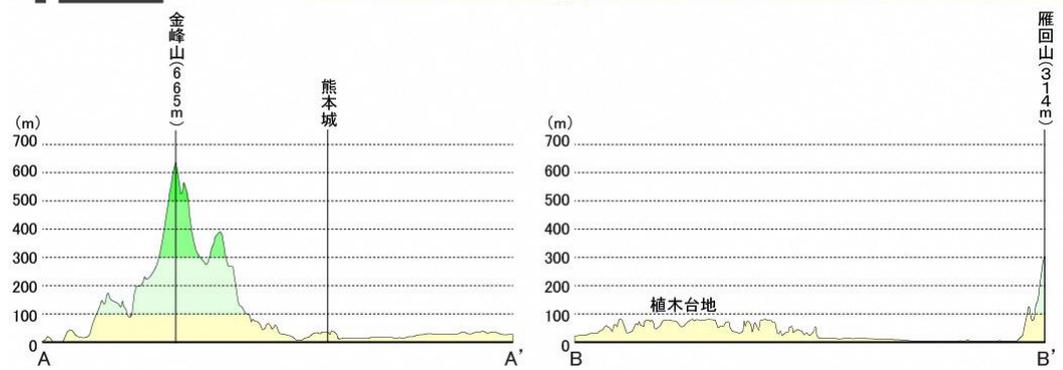
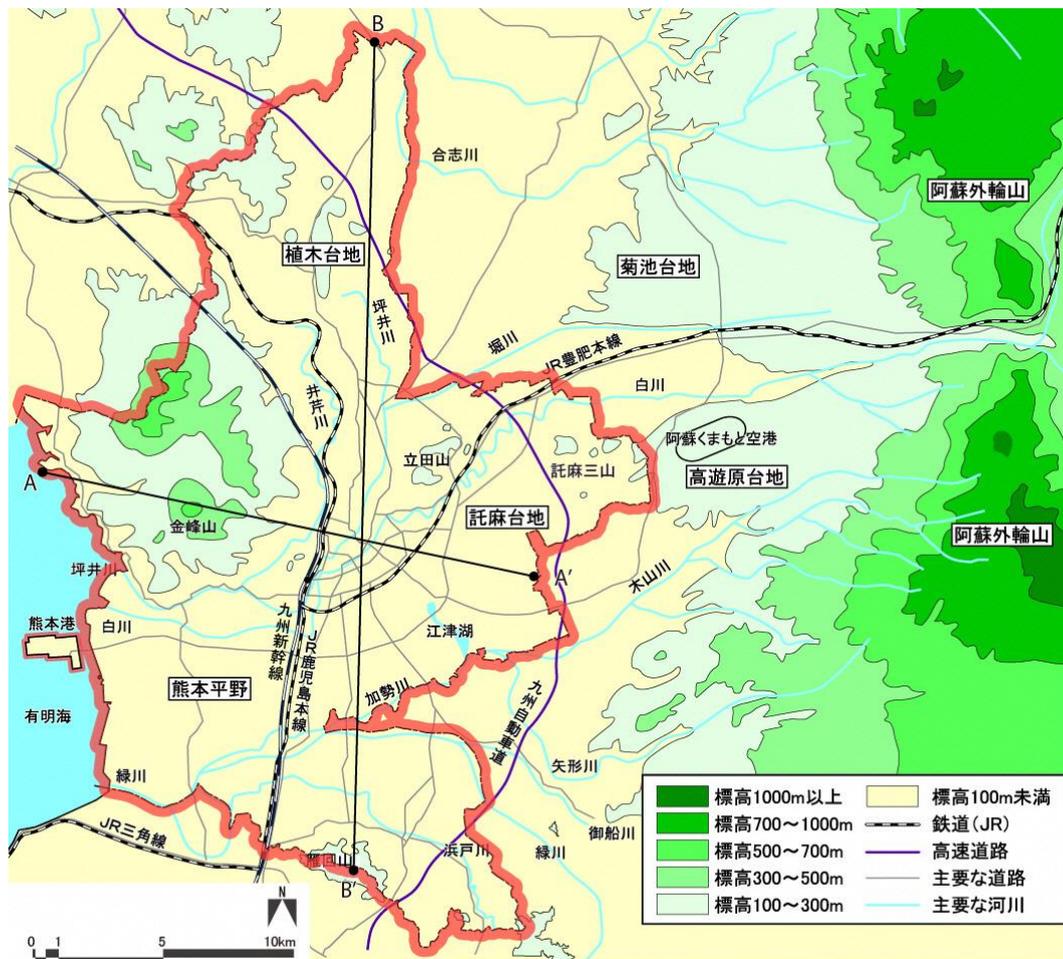


熊本市の位置

(2) 地形・地質・水質

① 地形

本市は、阿蘇外輪山^{がいりんざん}と金峰山系^{きんぽう}との接合地帯の上に位置し、西部と北部、東部にかけて金峰山^{たつだやま}、立田山^{たくだやま}、託麻三山^{たくまさんざん}など緑豊かな山や丘陵地帯が続いている。南部は白川の三角州で形成された平野が広がっており、田園地帯が市街地を囲んでいる。西部は日本一大きな干潟差と言われる有明海に面し、干潟など特徴のある自然環境と広大な平野が広がっている。

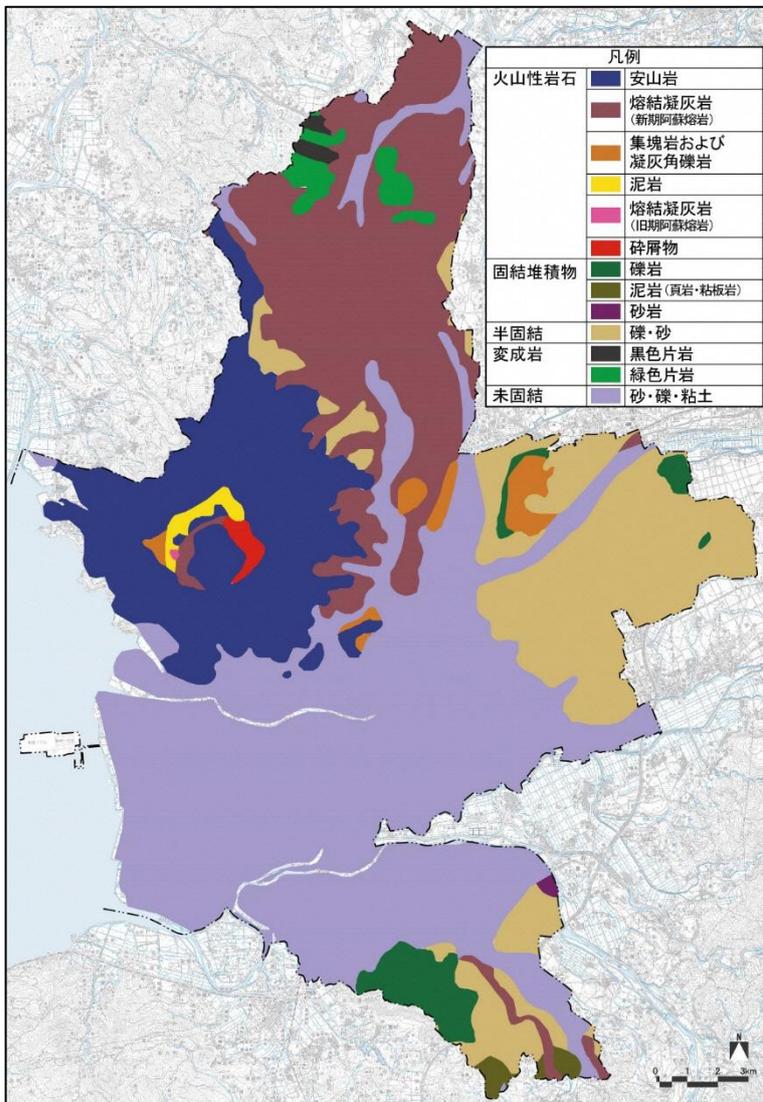


標高断面図

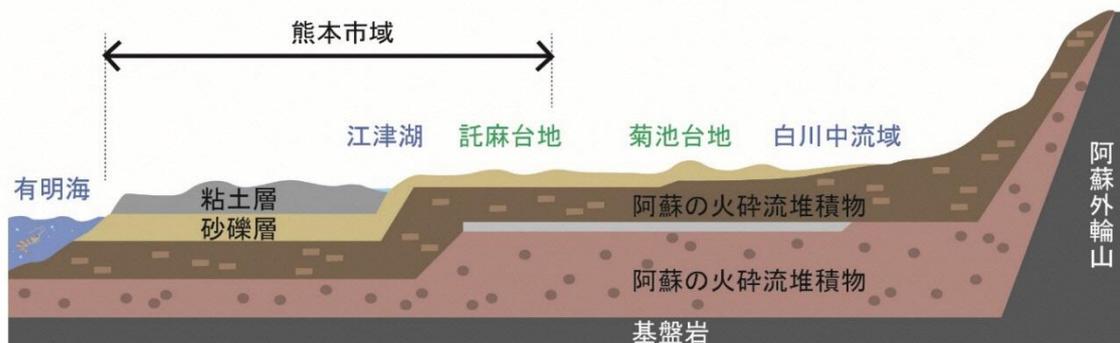
②地質

表層地質（地表近くの主な岩石や地層）は、金峰山塊は安山岩からなり、北部の台地は凝灰岩、東部の台地は砂礫層からなる。有明海に面し山地と台地で縁どられた広大な熊本平野は、砂・礫・粘土からなる。

また、これらの台地は、阿蘇火山の噴火により噴出された透水性の高い阿蘇火砕流堆積物や砂礫層が広く分布している。



表層地質図



地質のイメージ

③水質

河川は、阿蘇山系に源を発する白川と緑川、市北部に流れを発する坪井川と井芹川が市街を貫流し、有明海に注いでいる。水前寺や江津湖に発する流れは加勢川に合流し、市南部の田園地帯の灌漑用水として利用されている。



河川

<コラム1>

世界に誇る地下水都市

阿蘇外輪山の西側から連なる面積約 1,000 k m²の熊本地域（P13 図参照）の大地には、本市を含む 11 市町村があり、水道水源がほぼすべて地下水で賄われている。人口 74 万人である本市の水道水が 100%地下水で賄われていることは、人口 50 万人以上の都市として日本唯一であり、世界に誇る稀少な都市といえる。

上水道水源の全てを地下水で賄う事業体

順位	都道府県	自治体名	行政人口 (人)	年間給水量 (m ³)	一日平均給 水量 (m ³)	主な水源
1	熊本県	熊本市	739,015	79,341,000	217,400	深井戸水
2	岐阜県	岐阜市	408,116	52,307,000	143,300	深井戸水
3	静岡県	富士市	233,941	30,679,000	84,100	深井戸水
4	鳥取県	米子市	188,225	22,903,000	62,700	浅井戸水
5	宮崎県	都城市	165,075	18,242,000	50,000	深井戸水

資料：第2次熊本市都市マスタープラン

※社）日本水道協会発行の『平成26年度 水道統計』の数値を元に熊本市上下水道局にて集計

○阿蘇の自然システム

熊本地域は、阿蘇山の火砕流が厚く降り積もってできた大地であり、100m以上の厚さの地層が広く分布している。その地層は隙間に富み、水が浸透しやすい特徴があることから、熊本地域に降った雨は地下水になりやすく、地下に豊富で良質な水を蓄えることができる。

○加藤^{かとうきよまさ}清正の治水

熊本城を築いた加藤清正は、治水、利水における功績があると伝えられ、白川中流域の水田（大津町・菊陽町など）に堰や用水路を築き、大規模な水田開発を行ったと伝わる。熊本市内には、加藤清正が慶長年間（1596～1615）に築造したとされる白川水系最大の水利施設である渡鹿堰^{とろくぜき}があり、熊本市に多くの農業用水を供給し発展をもたらした。また、江津湖も加藤清正によって造られたものと伝えられており、江津塘^{ども}（清正塘^{ども}）と呼ばれる堤防の築堤がある。これによって、水前寺周辺の湧水が集められて江津湖が形成されるとともに、湿地帯であった土地は豊かな米の生産地となった。

加藤清正の功績と伝わる治水関係のエピソードは、市内に限らず県内各地に残されており、治水や土木の神様として現在も人々に親しまれている。

○地下水の現状

近年、宅地の郊外への拡散による農地の減少など、地下水の涵養域（地下水を染み込ませ蓄えておける場所）が失われてきたことにより、地下水位は長期的には低下傾向にある。そのため、熊本地域で地下水を守り伝えていくことが不可欠であり、市町村の枠を越えて、地下水涵養域の森林を整備するなど、地下水保全の取組を行っている。その取組が世界で高く評価され、平成25年（2013）に「国連“生命の水”最優秀賞」（国連事務局）を受賞した。

また、白川流域の水田開発にあたり築造された堰や用水路（白川流域かんがい用水群）についても各地域で保全と利活用が進められており、平成30年（2018）には世界かんがい施設遺産として登録を受けている。



地下水システム



熊本地域の地下水の流れ

<コラム2>

熊本水遺産

本市の水にかかわる自然、歴史、風習、人物、芸術など、有形または無形の資源を熊本水遺産として登録、顕彰する制度であり、本市の水資源について保全の機運を高めるとともに、その魅力を内外に発信し、本市の水に感謝し守る価値観や生活文化を後世に継承していくことを目的に実施している。

市民等からの公募、事務局である環境局環境推進部水保全課の推薦により行われており、有識者及び公募市民から構成される熊本水遺産委員会の意見を踏まえ、現在 92 件を登録している。(令和 2 年 (2020) 3 月現在)

種別	件数	種別	件数	種別	件数
水道・水循環	3	土木・建設物	12	地名	3
湧水・川	41	祭り・信仰・風習	7	人物	2
庭園	8	伝統文化・芸術・民話伝承	5	生態系	2
井戸	4	食・産業	5		

【熊本水遺産の例】

3. 健軍水源地

健軍水源地は市全体の水道水の 1/4 を賄う熊本市最大の水源地であり、自噴する井戸は市内水源地のうち、ここだけである。豊かで清冽な本市の水道水を象徴する施設である。

[場所] 熊本市東区水源 1 丁目



健軍水源地（自噴する井戸）

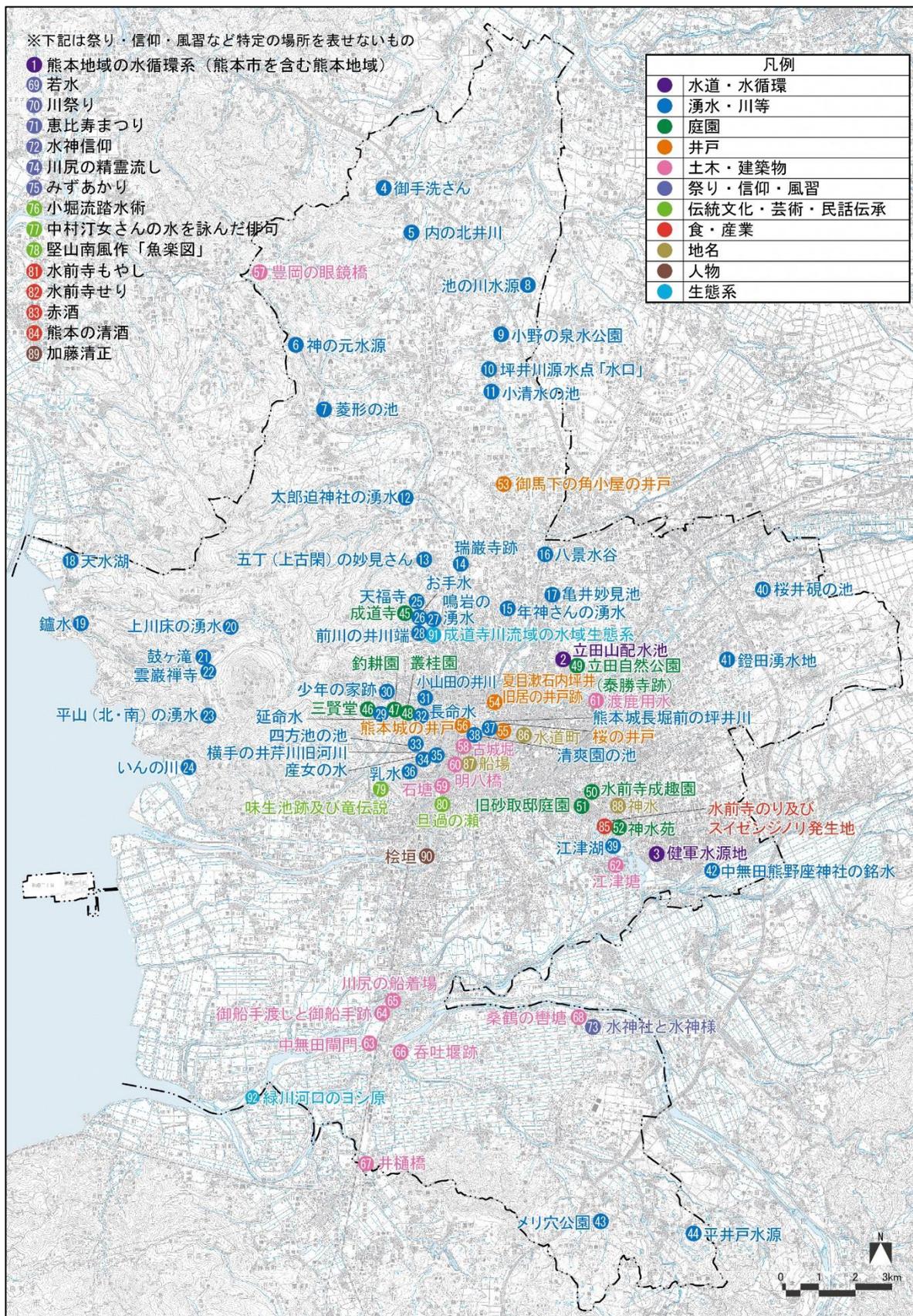
18. 天水湖

明治 5 年 (1872)、明治天皇の熊本行幸のとき献上された水で、この水を「天長水」、湧水池を「天水湖」と呼ぶようになったという。由緒ある湧水である。

[場所] 熊本市西区河内町白浜



天水湖

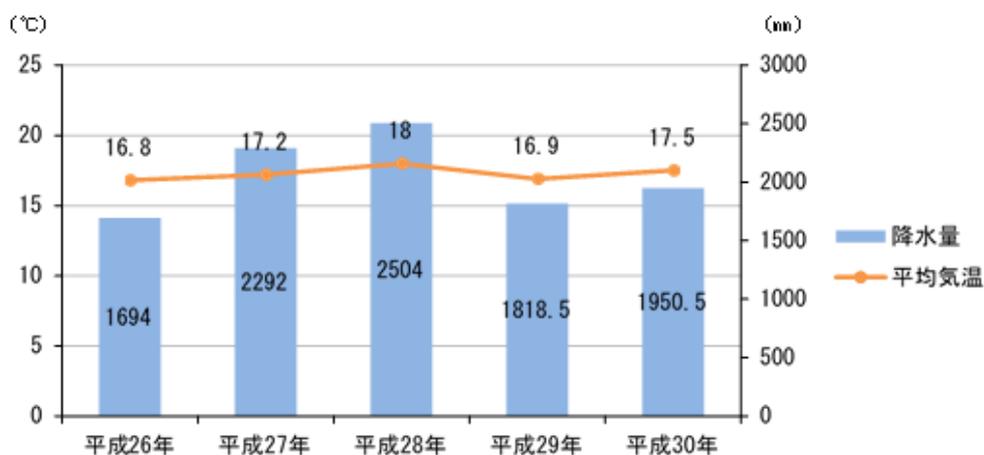


※スイゼンジノリ＝学名 水前寺のり＝食用としての名称

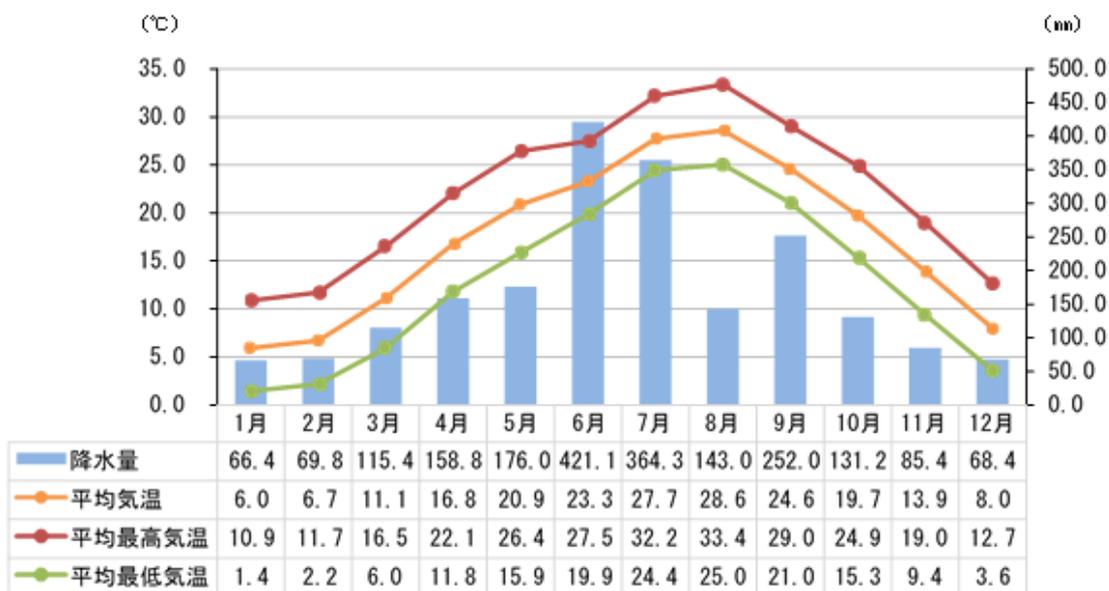
(3) 気候

本市の気候は、有明海とのあいだに金峰山系が連なるため、内陸盆地的気象条件※であり、平成26年（2014）から平成30年（2018）の平均気温は17.5℃、冬場1月の平均最低気温は1.4℃、夏場8月の平均最高気温は33.4℃を記録するなど、冬と夏の気温差が大きいことや日中の寒暖の差も大きいことが特徴である。

過去5年の平均降水量は2,057mmである。



過去5年間の平均気温と降水量



過去5年間の月別平均気温、降水量

資料：熊本市統計書（平成26・27・28・29・30年度版）

※ 海岸部に比べて気温の変動幅（1日の最高・最低気温の差や夏・冬の気温差）が大きく、湿度が一般に低い、山間部では降水量が多くなるのが特徴。

2. 社会的環境

(1) 市の変遷

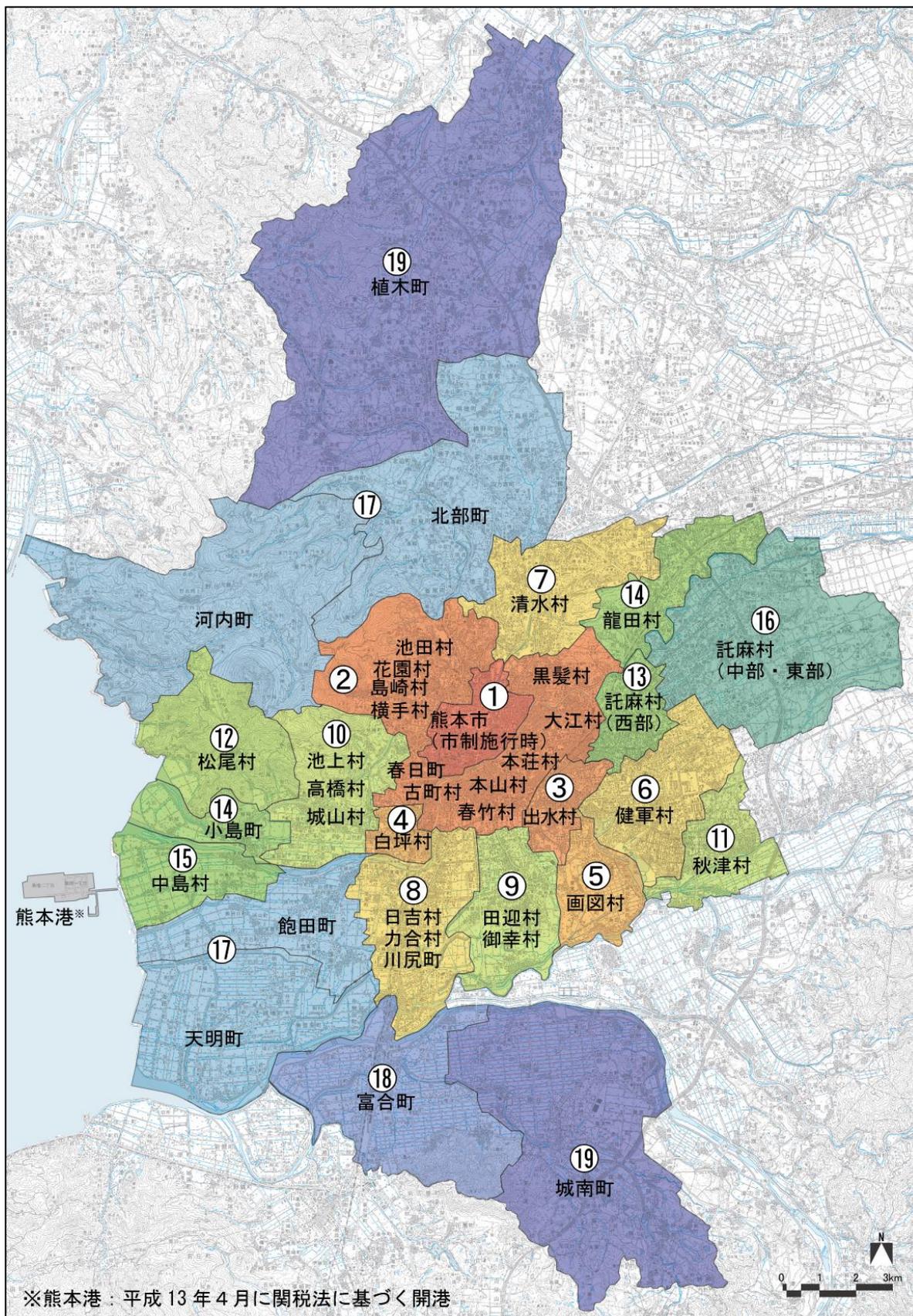
本市は、明治21年（1888）の市制・町村制施行に伴い、明治22年（1889）4月1日に全国31の市の一つとして発足し、大正期と昭和期に^{ほうたく}飽託郡の町村との合併を繰り返して発展してきた。

平成20年（2008）10月6日に^{しもましき}下益城郡^{とみあいまち}富合町と合併、平成22年（2010）3月23日に^{じょうなんまち}下益城郡城南町及び^{かもと}鹿本郡^{うえきまち}植木町と合併し、平成24年（2012）4月1日に全国で20番目の政令指定都市へと移行することになった。

合併変遷表

	合併年月日	合併町村
①	明治22年4月1日	熊本市発足
②	大正10年6月1日	春日町、黒髪村、池田村、花園村、島崎村、横手村、古町村、本荘村、春竹村、大江村、本山村
③	大正14年4月1日	出水村
④	昭和6年6月1日	白坪村
⑤	昭和7年12月15日	画図村
⑥	昭和11年10月1日	健軍村
⑦	昭和14年8月1日	清水村
⑧	昭和15年12月1日	川尻町、日吉村、力合村
⑨	昭和28年4月1日	田迎村、御幸村
⑩	昭和28年7月1日	高橋村、池上村、城山村
⑪	昭和29年10月1日	秋津村
⑫	昭和30年4月1日	松尾村
⑬	昭和31年4月1日	託麻村の一部
⑭	昭和32年1月1日	小島町、龍田村
⑮	昭和33年4月1日	中島村
⑯	昭和45年11月1日	託麻村
⑰	平成3年2月1日	北部町、河内町、飽田町、天明町
⑱	平成20年10月6日	富合町
⑲	平成22年3月23日	植木町、城南町

第1章 熊本市の歴史的風致の背景



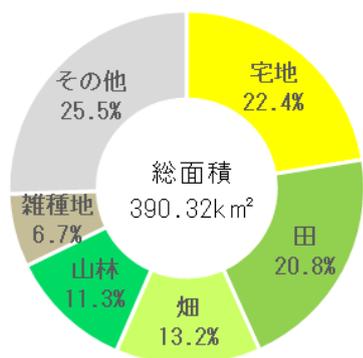
熊本市の変遷

(2) 土地利用

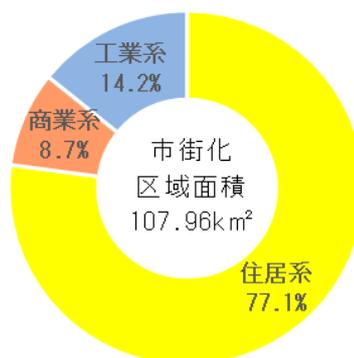
地目別の利用状況は、宅地が約22%、田畑が合わせて約34%となっている。

平成30年(2018)10月時点、面積390.32k㎡のうち、約354k㎡(約91%)を都市計画区域に指定している。そのうち約108k㎡(約30%)を市街化区域、約246k㎡(約70%)を市街化調整区域に指定している。

市街化区域のうち用途地域の割合は約77%が住居系、約9%が商業系、約14%が工業系となっている。

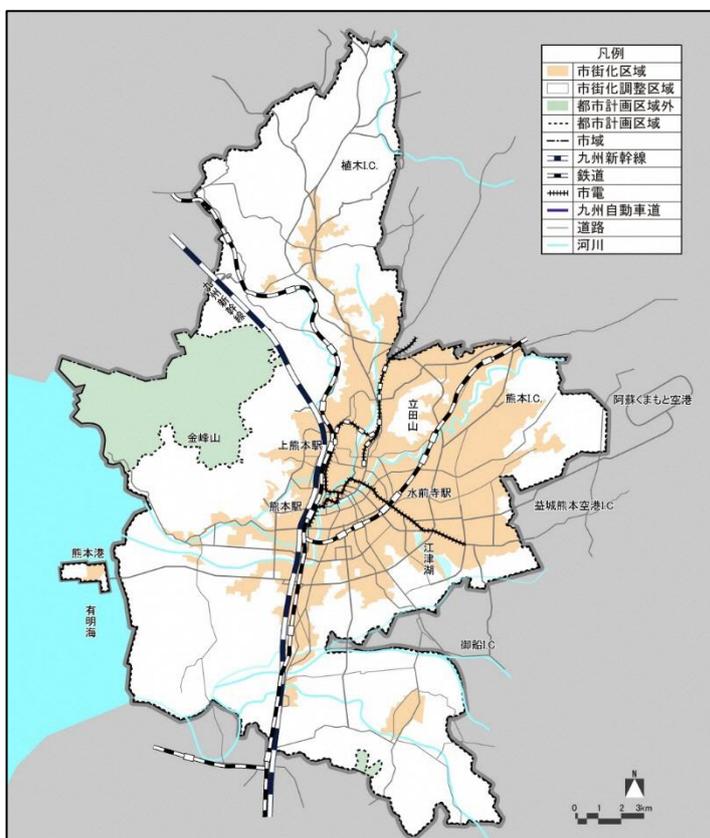


地目別面積
(平成30年10月1日現在)



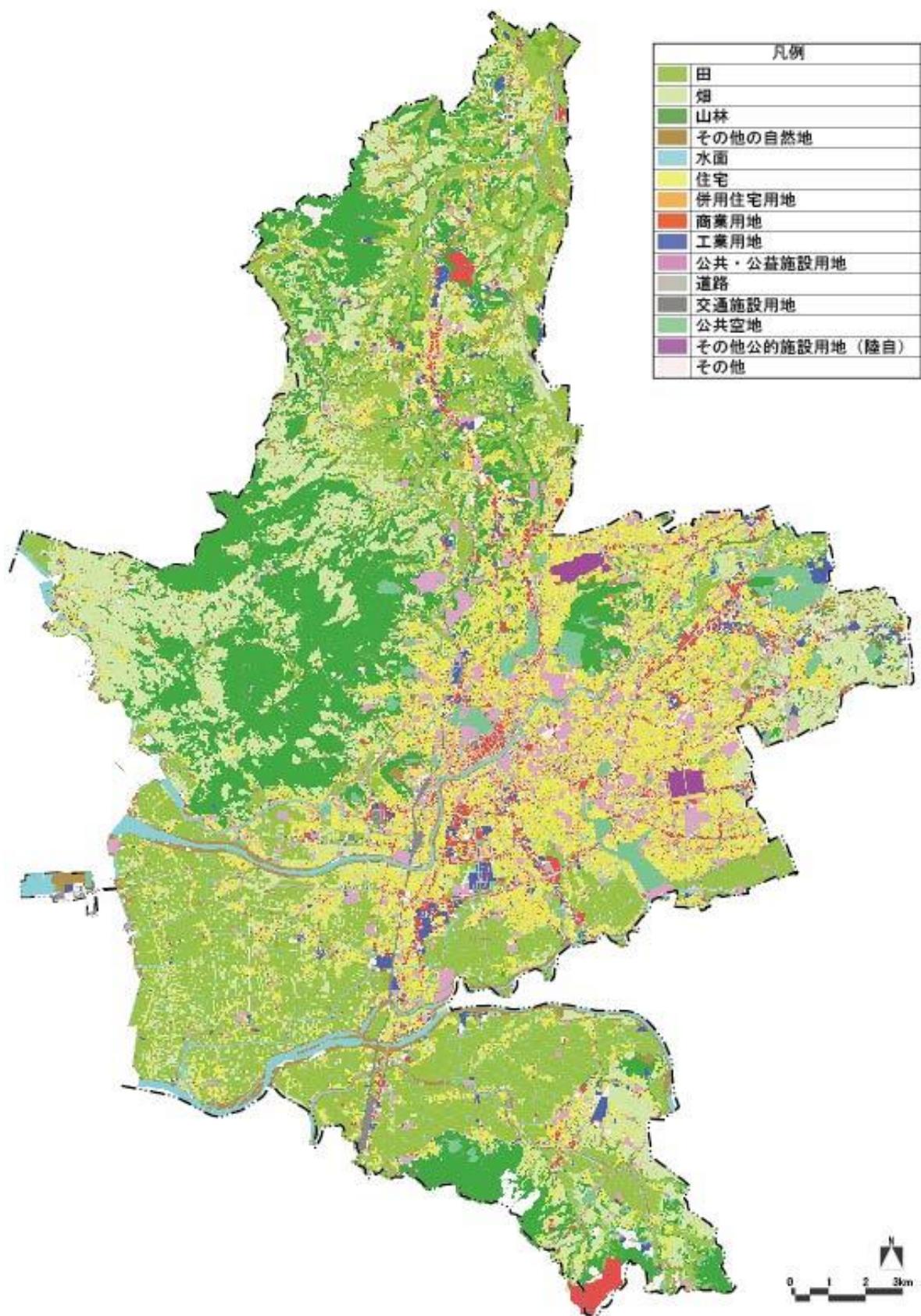
市街化区域面積の内訳
(平成30年10月1日現在)

資料：熊本市統計書(平成30年度版)



熊本市の都市計画区域

第1章 熊本市の歴史的風致の背景



土地利用

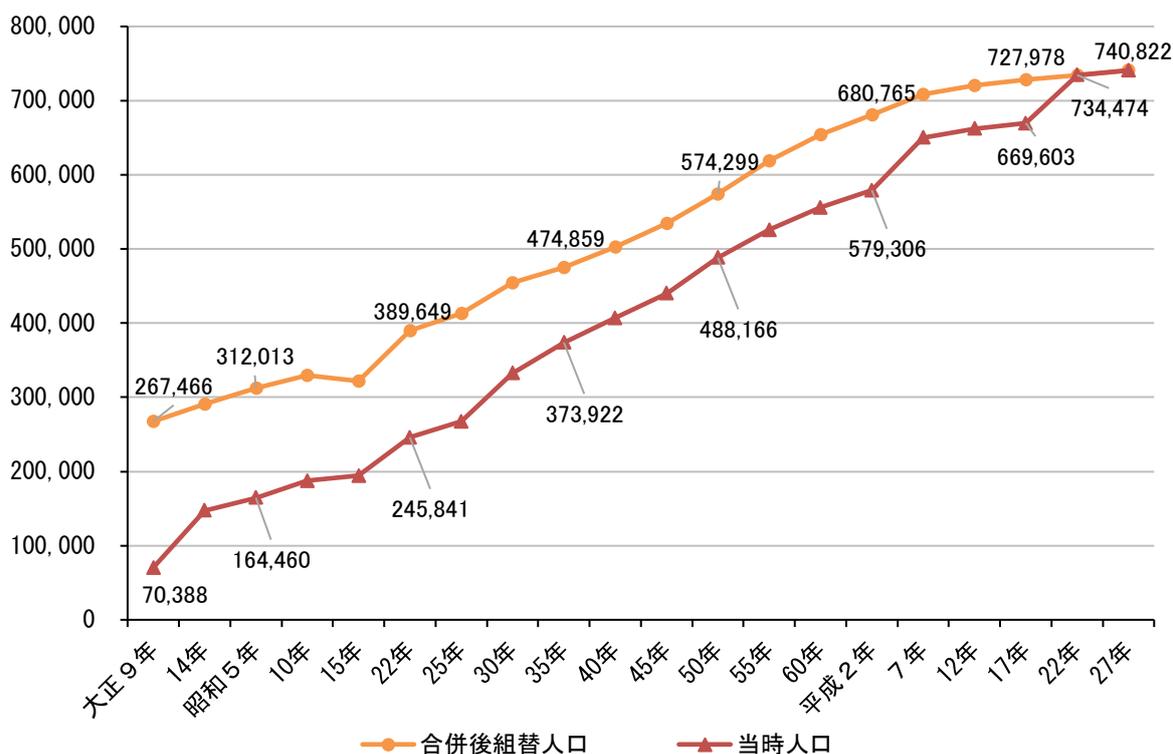
資料：平成24年都市計画基礎調査

(3) 人口動態

市制が施行された明治22年(1889) 当时に42,725人であった人口は、その後、数次にわたる合併に伴う市域の拡大や都市化の進展により増加し、昭和55年(1977)には50万人を超えた。平成3年(1991)2月1日には飽託郡4町との合併により627,568人となり、当时は、全国順位で15位の人口規模となった。

平成17年(2005)の国勢調査では、本市の人口は669,603人で、全国順位は20位となったが、平成20年(2008)10月の富合町との合併、平成22年(2010)3月の植木町・城南町との合併により、平成22年(2010)の人口は734,474人と全国順位で18位に浮上し、平成24年(2012)4月に九州で3番目に政令指定都市へ移行した。

平成27年(2015)の人口は740,822人、世帯数は315,456世帯となっている。



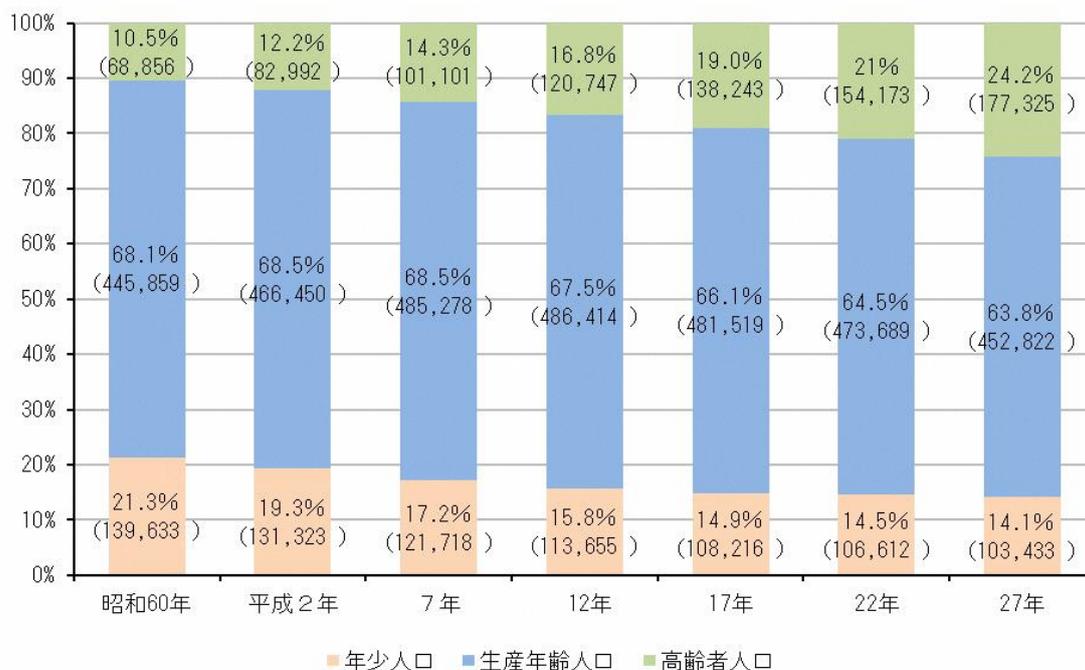
総人口の推移

※合併後組替人口は国勢調査人口を可能な限り現在の市域に組み替えたものである。

資料：熊本市人口ビジョン、平成27年国勢調査

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

平成27年（2015）の年齢別人口は、年少人口（0～14歳）が14.1%（103,433人）、生産年齢人口（15～64歳）が63.8%（452,822人）、高齢者人口（65歳以上）が24.2%（177,325人）であり、少子高齢化が急速に進展している。



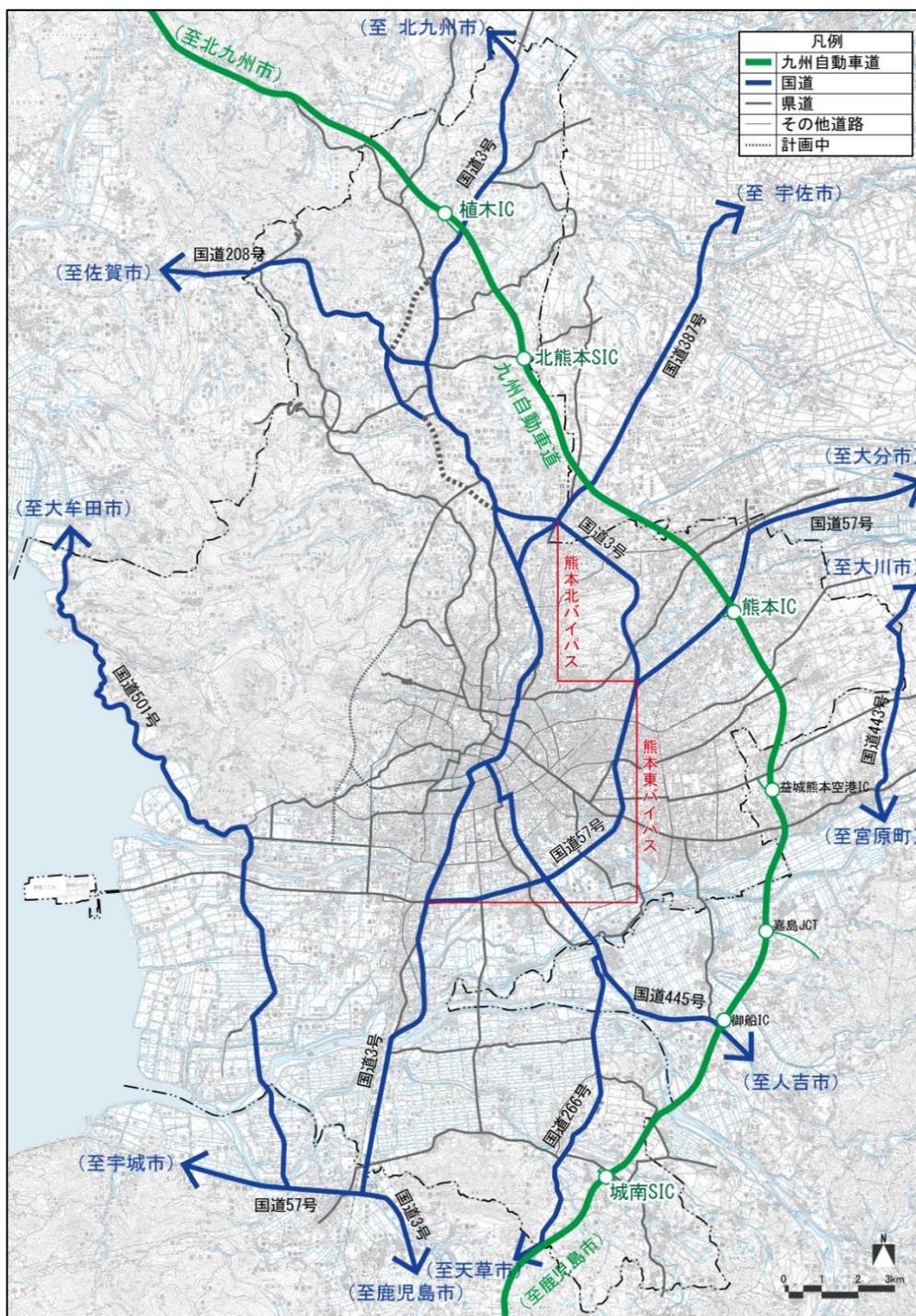
人口構成比の推移

（※人口構成比は、合併後組替人口の数値を使用）

資料：熊本市人口ビジョン、平成27年国勢調査

(4) 交通機関

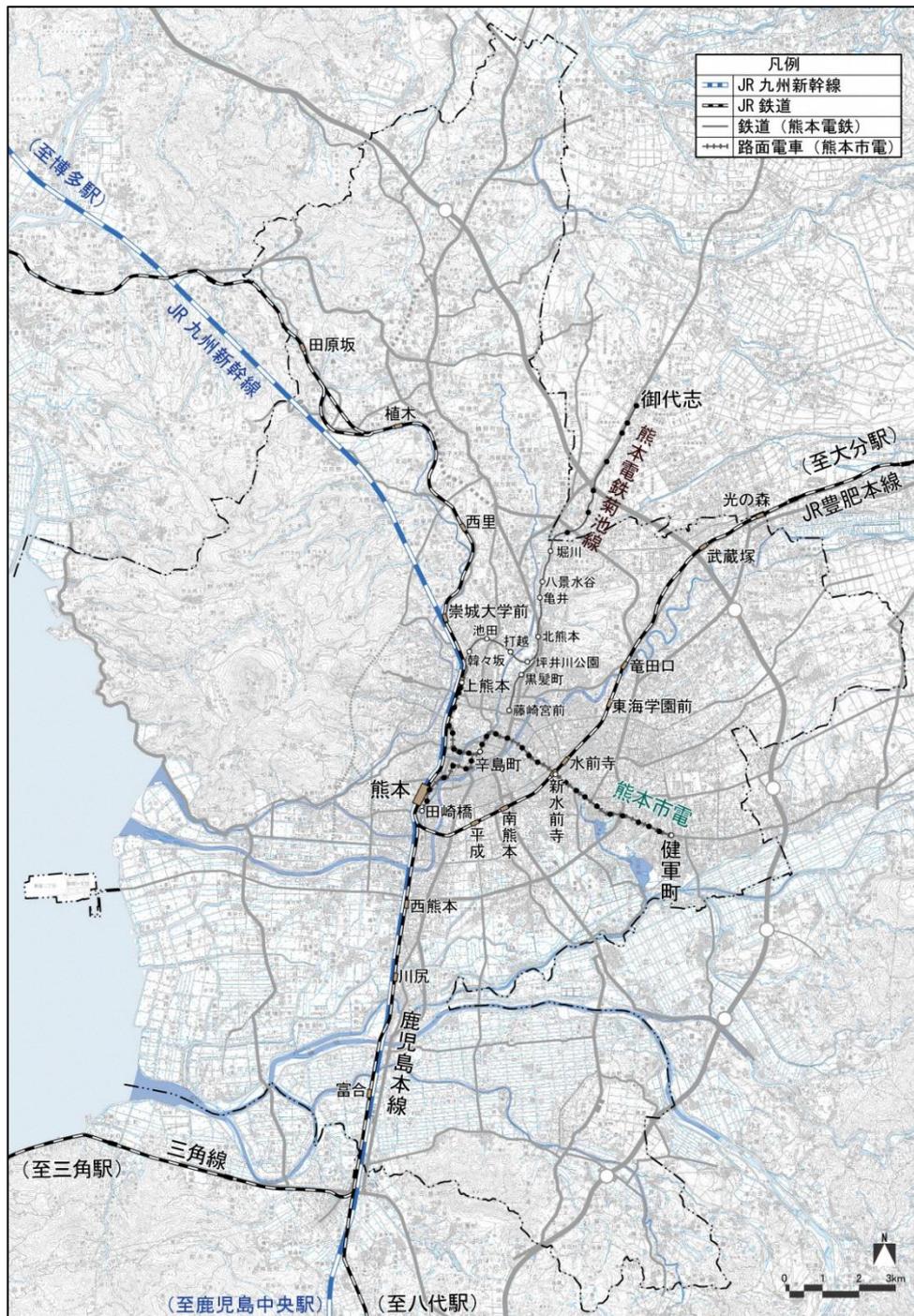
道路は、北九州市から鹿児島市までを縦貫する国道3号が市域中央を貫くとともに、中央東側には本市の環状道路の一部を構成する熊本北バイパス（国道3号）と熊本東バイパス（国道57号）がある。また、九州自動車道が市域の東側を通っており、市内には2か所のインターチェンジ（植木IC、熊本IC）と2か所のスマートインターチェンジ（北熊本SIC、城南SIC）を有している。



第1章 熊本市の歴史的風致の背景

鉄道は、JR九州新幹線の熊本駅があり、市の南北方向にJR鹿児島本線が通っている。東西方向には熊本駅を起点としてJR豊肥本線が通っており、さらに熊本電鉄菊池線が本市の中心部の藤崎宮前駅及び上熊本駅を起点として、隣接する合志市の御代志駅まで通っている。

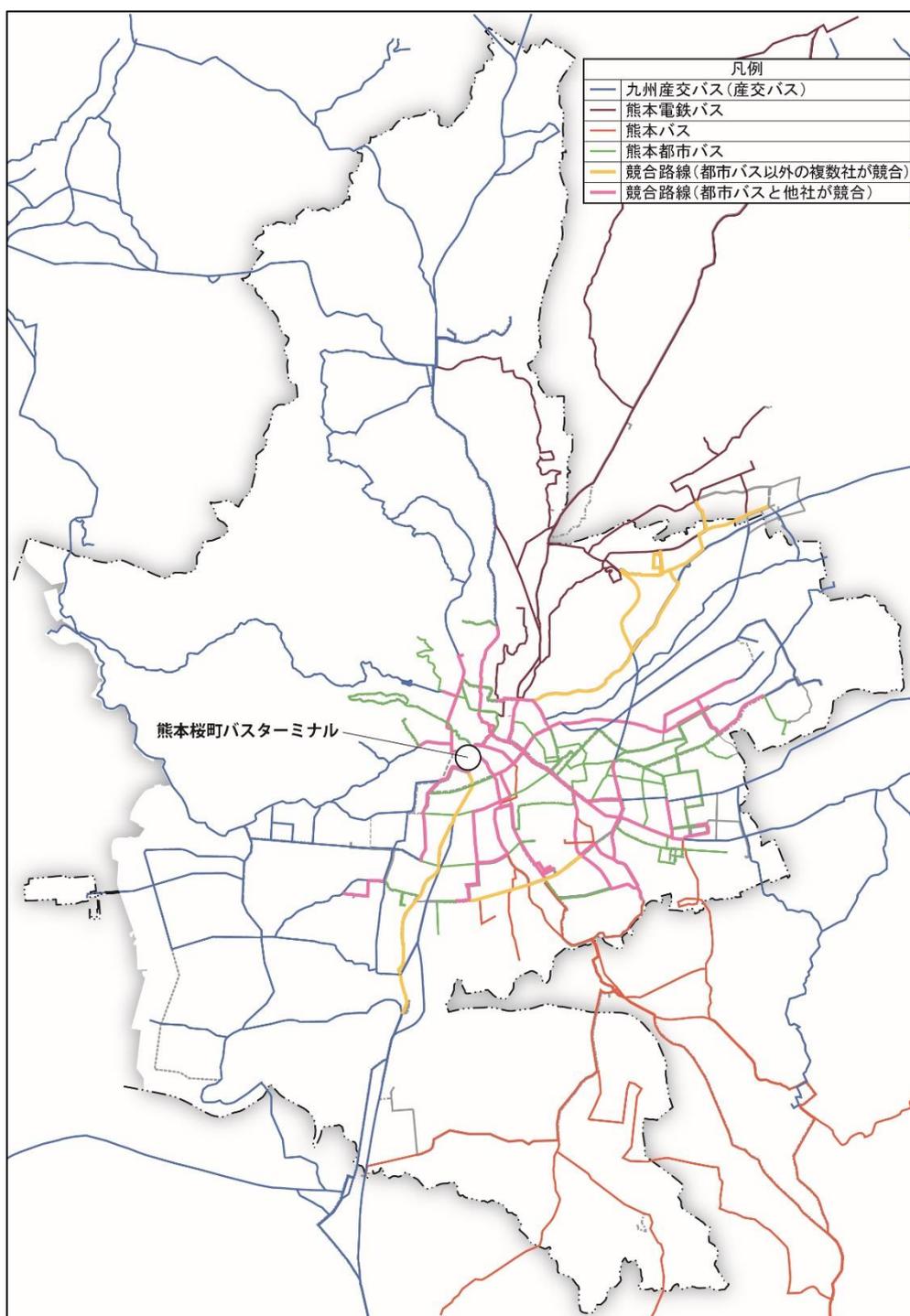
熊本市電（路面電車）は、熊本駅周辺の田崎橋及び上熊本駅を起点として、本市の東部にある健軍町まで通っている。



鉄道網

市内の路線バスは、九州産交バス（産交バス）、熊本電鉄バス、熊本バス、熊本都市バスが運行しており、熊本桜町バスターミナルを起点として放射方向かつ網の目状に路線バス網が張り巡らされている。

九州産交バスは、熊本市と九州主要都市を繋ぐ高速バスや、阿蘇、黒川、湯布院、別府と九州を代表する観光地を繋ぐ高速バスを運行している。



バスの路線網

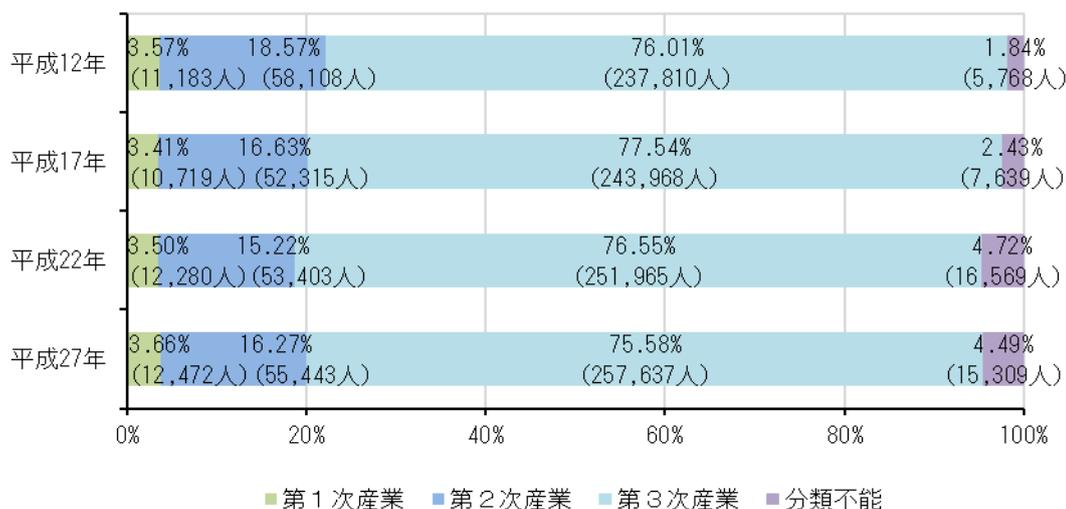
第1章 熊本市の歴史的風致の背景

(5) 産業

就業者数は、平成12年（2000）は312,869人で、平成27年（2015）は340,861人と増加したが、構成比率の推移に大きな変化はない。

本市の産業構造は、卸売・小売、運輸、通信、観光、医療、教育から公務にいたる各種サービスを提供する第3次産業が市総生産額および就業者数の8割を占めており、サービス産業中心の都市である。

そのほか、IC産業の集積、全国でも高い生産性を誇る農業、水産業など各種産業が展開されている。



産業別就業人口

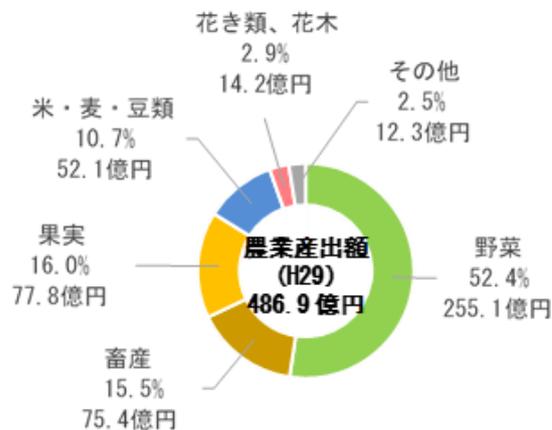
資料：平成12・17・22・27年国勢調査

① 農水産業

本市は清らかな地下水をはじめ豊かな自然環境に恵まれており、それぞれの地域で特色を生かした多数の品目の産地が形成されている。上質な農水産物は関東・関西圏をはじめ全国に出荷されている。

ア 農業

平成29年（2017）の農業産出額は486.9億円で、そのうち野菜が52.4%、畜産が15.5%、果実が16.0%、米が10.7%を占めており、多様かつバランスの良い生産状況のなか、特に園芸作物に強みがあることが本市農業の特徴と言える。



熊本市の農業産出額の構成（平成29年産）

資料：統計で見る熊本市の農水産業

本市は、なす、すいか、メロン、うんしゅうみかんなどの園芸作物の栽培が特に盛んである。また、畜産についても、乳用牛、肉用牛、豚、鶏の飼養が盛んに行われている。

【特産品】

○なす

本市におけるなすの商業栽培は、他の野菜と比べ歴史が古く、大正時代の初期ごろには既に出荷が行われていた。現在、本市は国の指定産地（野菜生産出荷安定法に基づく農林水産大臣が指定する産地）であり、全国屈指の生産量を誇る。主な産地は飽田・天明・植木・松尾などで、これらの地域から全国各地に周年出荷されている。飽田・天明・松尾においては、秋から翌年の春にかけて出荷される「冬春なす」という作型が盛んで、加温設備を備えたビニールハウスの中で「筑陽」という品種が主に栽培されている。植木においては、実の長さが60cmにもなる「大長なす」も出荷されている。



なす

○すいか

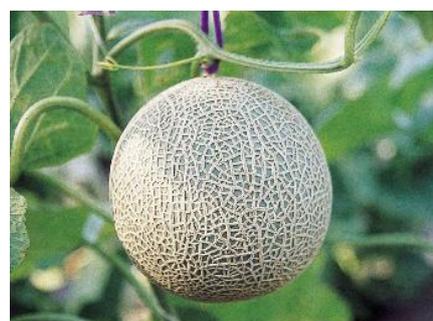
本市における販売を目的としたすいかの生産は、大正時代末期ごろから始まったとされている。現在、本市は全国有数の生産地であり、植木・北部などが主な生産地である。大玉すいかを主体に生産しており、収穫時期や栽培方法に合わせて品種選定を行っているため、数多くの品種が作られている。



すいか

○メロン

熊本における本格的なメロンの栽培は、昭和30年代後半のプリンスメロンから始まった。現在では、本市は全国的な産地となり、北部・植木・東部の畑地帯・有明海沿岸の西南部の水田地帯・富合・城南などの地域を中心に生産されている。アールスメロンやアンデスメロン、クインシーメロンなどが主に栽培されている。



メロン

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

○うんしゅうみかん

本市におけるうんしゅうみかん栽培の歴史は古く、今からおよそ200年前の江戸時代に時の領主が生産を奨励したのが始まりといわれている。現在では、主に河内・芳野・松尾・池上・植木などで生産され、本市は全国有数の産地となっている。

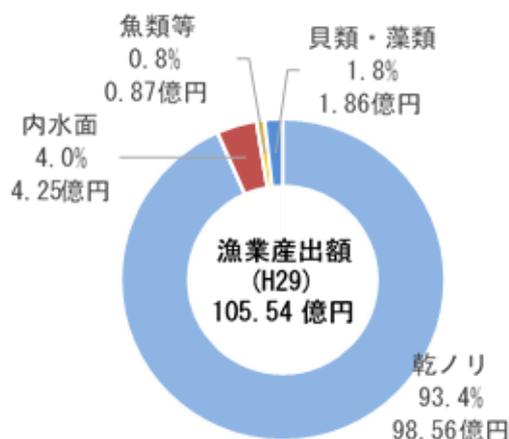


うんしゅうみかん

イ 水産業

有明海の広大な干潟漁場と沖合漁場において、ノリ養殖業や採貝業、小型漁船による網漁業を中心とする海面漁業が営まれている。ノリ養殖業は本市の基幹漁業であり、平成29年（2017）の漁業産出額は約106億円で、そのうちノリが約93%を占めている。そのほか、アサリやハマグリ、クルマエビなども漁獲される。

一方、江津湖周辺では清らかな地下水を利用した観賞魚（錦鯉・金魚・メダカ）が生産され、富合町、植木町ではウナギの養殖が営まれている。



熊本市の漁業産出額の構成（平成29年産）

資料：統計で見る熊本市の農水産業

【特産品】

○ノリ

ノリ養殖は、大正時代に玉名市大浜より種の付いた女竹^{めだけ}を坪井川河口に移植して養殖が始まった古い歴史がある。また、養殖の企業化が開始され、全国でも初めて組織的なノリ養殖業の成功をみた。その後、昭和35年（1960）ごろから人工採苗^{さいびょう}技術が開発され本格的な生産が始まった。さらに、昭和52年（1977）には全自動乾燥機（加工機）が普及し、省力化が図られている。養殖場は、有明海の沖合約10kmにまで広がり、10月から翌年の3月まで、黒くて柔らかく香りの良い上質なノリが生産されている。



ノリの収穫風景

○アサリ

広大な干潟漁場は、古くから天然のアサリが発生・育成する場所として知られ、主に4月から9月にかけて手掘りや腰巻ジョレン（ヨイシヨ）と呼ばれる漁具を使って漁獲される。アサリの資源量は、気象海況



ヨイシヨを用いたアサリの漁獲風景

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

に大きく左右されるため年変動が大きく、平成28年（2016）熊本地震とその後の豪雨により流出した土砂が堆積し、資源が激減した漁場も見られた。現在も、削土、覆砂等や底質の状況調査による漁場の整備・保全といった資源回復に向けた努力が続けられている。

○ハマグリ

白川、緑川の河口に広がる干潟漁場では、ハマグリが漁獲されている。日本国内で流通しているハマグリ類には、ハマグリ、チョウセンハマグリ、シナハマグリ等があるが、日本国内の干潟域に古くから生息するのは「ハマグリ」である。ハマグリ漁場は、有明海のほか国内でも数えるほどしかないため、希少性が高く市場では高値で取引される。本市では、アサリと同様に天然のハマグリが熊本の名産となるよう守り増やす活動をしている。



ハマグリ

○クルマエビ

干満の差が大きい有明海の広大な浅海干潟漁場は、天然クルマエビの生息場として知られており、主に4月から10月までのあいだ、エビ流し網やげんしき網などの刺し網という漁法で漁獲される。クルマエビは、平成元年（1989）に「熊本県の魚」に指定され、本市では資源の維持・回復と漁獲安定のため毎年稚エビの放流を行っている。



「熊本県の魚」クルマエビ

○観賞魚（錦鯉）

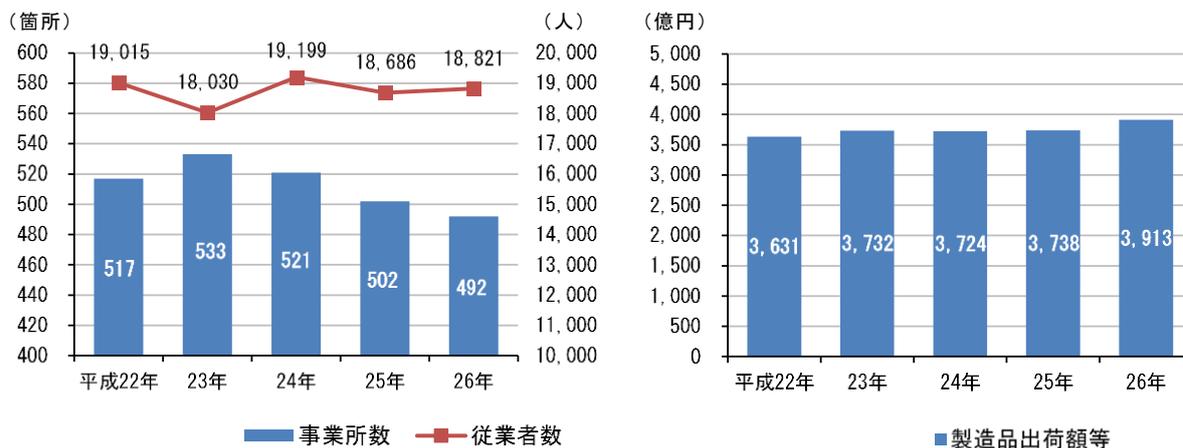
江津湖の周辺では、清らかな湧き水を利用して、錦鯉や金魚、メダカの生産販売が行われている。また春には、生産者や愛好家が集まり錦鯉品評会が開催されている。特に錦鯉は「泳ぐ宝石」とも言われ、愛好家のあいだでは高値で取引されているものもある。



観賞魚（錦鯉）

②工業

平成26年（2014）現在、事業所数（従業員4人以上の事業所）は492箇所、製造業出荷額は約3,913億円である。事業所数は減少傾向にあるものの、従業者数と製造品出荷額は概ね横ばいで推移している。



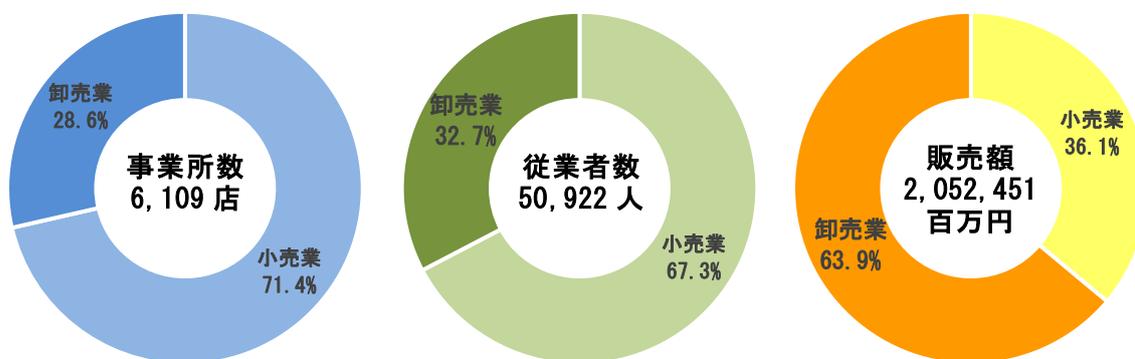
事業所数と従業者数の推移

製造品出荷額の推移

資料：平成26年工業統計調査（12月31日時点）

③商業

平成26年（2014）現在、事業所数は6,109店、従業者数は50,922人、年間商品販売額は約2兆525億円で、事業所数と従業者数は小売業、年間商品販売額は卸売業の割合が高い。



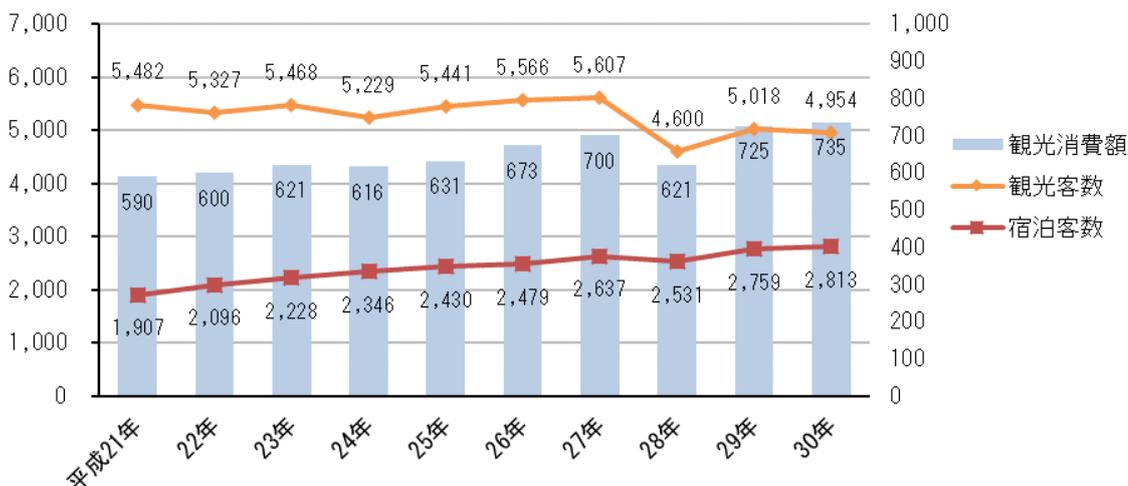
商業の業種別構成割合

資料：平成26年商業統計調査（7月1日時点）

④観光業

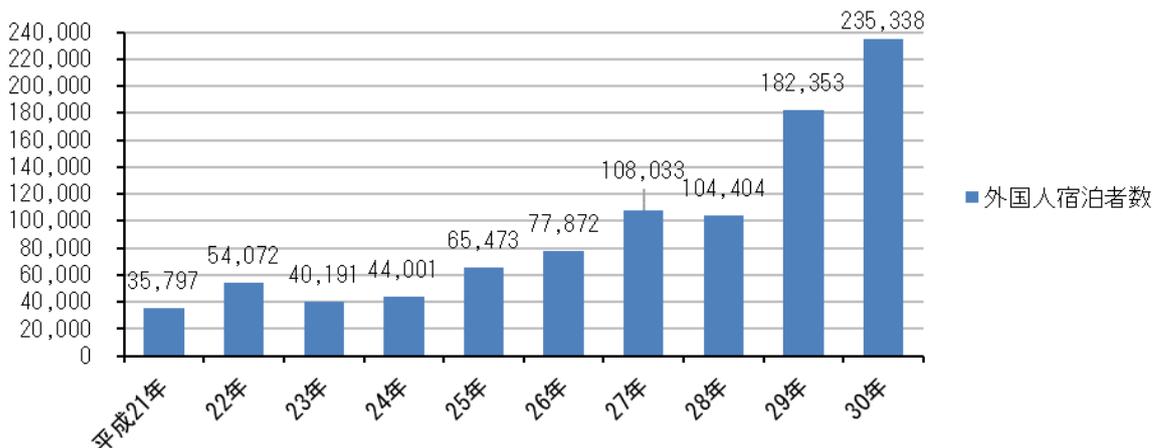
本市には、熊本城や水前寺成趣園すいぜんじじょうじゅえんをはじめとした観光名所があり、県内外から多くの観光客が訪れている。平成28年（2016）の熊本地震の発生に伴い、熊本城をはじめとする多くの観光施設や宿泊施設が被害を受け、観光客数、宿泊客数、観光消費額の全ての数値が前年に比べ減少した。特に、観光客数は熊本城への入園制限など、観光施設への立ち入りが制限されたこともあり、前年に比べ大幅に減少したが、一方で宿泊客数は地震直後に一時的に落ち込んだものの、前年比で僅かな減少にとどまった。また、平成29年（2018）以降の外国人宿泊数は地震前後の2か年に比べ大幅な増加が見られた。地震によって知名度が向上し、期間経過と共にマイナスイメージから観光地「KUMA

MOTO」として認識されてきたことや、熊本空港の国際線の路線数が地震発生前の体制に回復するなど、外国人観光客が訪れやすい環境が整ってきたことが要因として考えられる。



観光客数の推移

資料：平成30年熊本市観光統計



外国人宿泊者数の推移

資料：平成30年熊本市観光統計

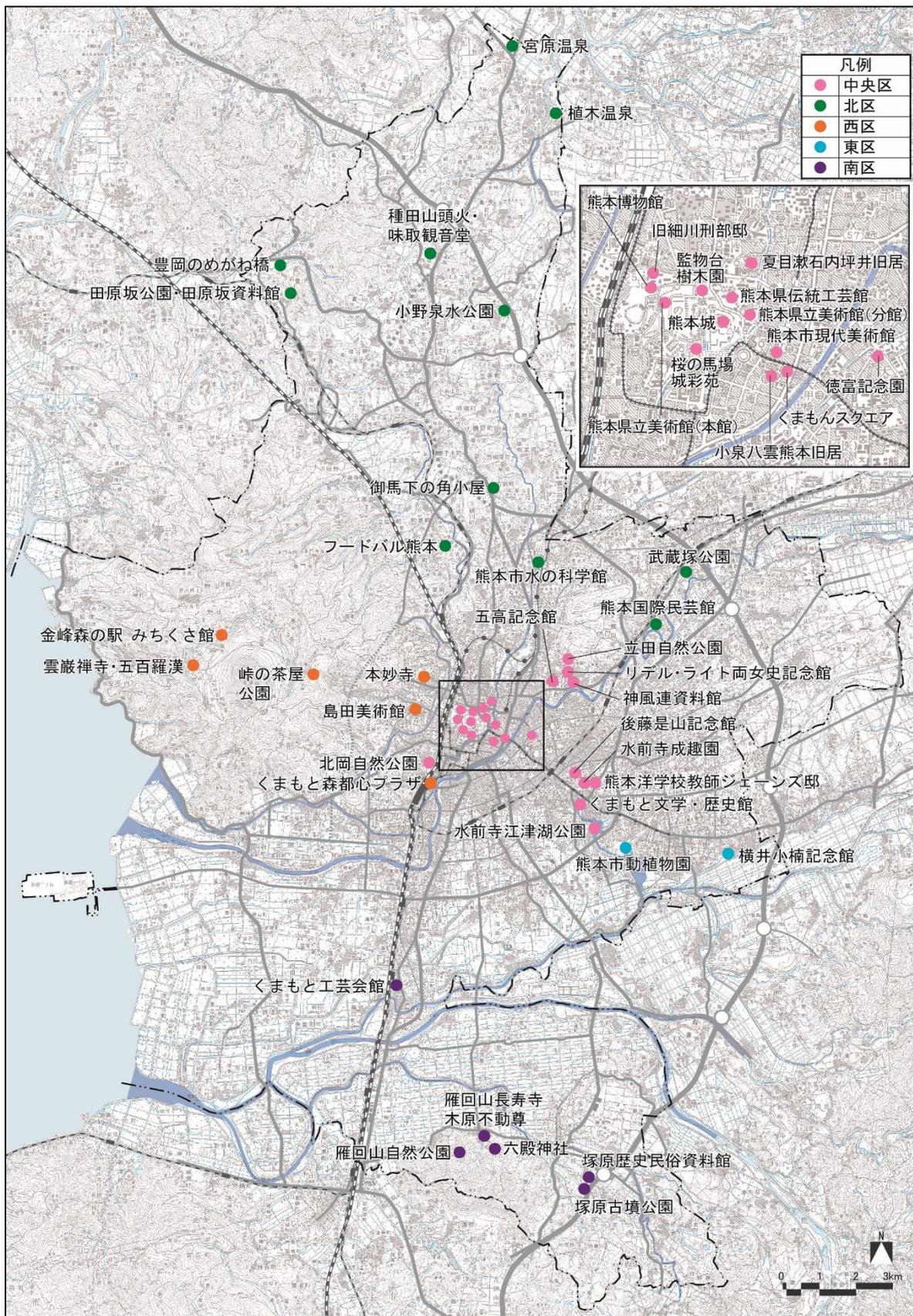
観光施設入園者数

施設名	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
熊本城 ※H28.5以降はこの丸広場でカウント	1,631,655	1,715,642	1,444,101	2,072,936	1,704,769
城彩苑	985,382	1,020,585	956,173	1,190,246	1,057,151
(うち湧々座)	(128,147)	(138,635)	(114,824)	(113,219)	(118,520)
フードパル熊本	767,900	760,000	716,400	680,500	667,800
熊本市動植物園	742,302	741,068	205,728	288,809	360,709
水前寺成趣園	358,827	379,650	357,265	429,994	439,466
くまモンスクエア	344,902	357,170	423,188	492,245	225,336
熊本市現代美術館	229,164	302,253	410,139	235,827	242,665
熊本県立美術館 分館	216,587	217,701	88,823	122,696	204,856
熊本県伝統工芸館	147,745	140,552	138,889	154,620	154,937
植木温泉	133,889	128,801	113,160	105,051	90,730
水の科学館	109,380	121,535	96,651	106,824	128,414
熊本県立美術館 本館	97,025	134,564	45,203	107,850	109,377
旧細川刑部邸	52,560	53,454	15,547	※地震により被災し休館中	
くまもと工芸会館	49,788	52,208	46,596	49,323	49,663
熊本博物館	35,547	17,951	※リニューアル		11,500
田原坂西南戦争資料館	25,522	26,744	55,441	61,940	101,596
岩戸観音・五百羅漢	24,605	26,742	26,600	26,600	16,557
金峰森の駅みちくさ館	17,742	19,387	16,624	17,949	18,575
くまもと文学・歴史館 (旧 熊本近代文学館)	14,775	※ リニューアル	28,547	33,084	44,980
夏目漱石内坪井旧居	10,439	13,336	3,660	※地震により被災し休館中	
監物台樹木園	10,014	8,811	8,645	14,160	14,851

※平成26年の入園者数が1万人を超える施設のみ掲載

資料：平成30年熊本市観光統計

第1章 熊本市の歴史的風致の背景



主な観光施設

3. 歴史的環境

(1) 歴史

① 原始～古代

熊本市域には、旧石器時代から人々が生活していたことが明らかになっている。旧石器時代の遺物は表面採集されたものも多いが、平山石ノ本遺跡、^{すずりかわ}硯川遺跡群、^{しずめ}沈目遺跡等では発掘調査によってこの時代の遺跡が確認されている。

縄文時代には土器が作られるようになり、本市でも多くの縄文土器が見つかるとともに、^{ごりょうかいづか}御領貝塚、^{あだか}阿高・^{くろぼしかいづか}黒橋貝塚といった九州を代表する貝塚も形成されている。縄文時代の終わりごろには、^{たろうざこ}太郎迫遺跡や^{かみなべ}上南部遺跡、健軍神社周辺遺跡群など大規模な集落が多く造られることが特徴的で、土偶といった特殊な遺物も出土している。

弥生時代には熊本でも稲作が始まり、江津湖遺跡群では農作物を収穫する石包丁や、米の痕跡が残った土器等が見つかっている。青銅器も、^{つるはた}鶴羽田遺跡の銅戈をはじめとして出土例が増えており、鉄器も^{くわみず}神水遺跡等で多く見つかっている。また、近年の^{はちのつぼ}八ノ坪遺跡や^{かみだい}上代町遺跡群の調査によって、朝鮮半島等の様々な地域の文物が流入していたことも分かってきている。

古墳時代には、熊本市域にも高熊古墳等の前方後円墳をはじめとする古墳が造営された。特徴的なのが装飾古墳で、熊本市には^{せごんこうこふんぐん}千金甲古墳群や釜尾古墳といった全国的に著名な古墳がある。広大な塚原古墳群では非常に多彩な墳墓が造営されるとともに、朝鮮半島の土器等が出土していることも注目される。上代町遺跡群では元々は日本にいなかった馬の全身骨が出土し、重要な発見となった。

7世紀の終わりには^{ひのくに}肥国が前後2つに分けられて現在の熊本県に繋がる「^{ひごのくに}肥後国」が設置されたと考えられている。現在の熊本市域には広大な伽藍の^{がらん}国分寺・国分尼寺が建立され、国府も変遷に諸説あるが二本木等に置かれたと想定されている。

奈良～平安時代の各国は生産力で大・上・中・下の4等級に分けられていた



御領貝塚



塚原古墳群

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

が、肥後国は平安時代初期の延暦14年（795）に上国から大国へと昇進している。九州で唯一の大国であったが、そのころの肥後国の生産力は九州諸国で群を抜いており、九州を管轄する大宰府の財政においても中心的位置を占めていたことが知られている。

肥後国の国司には道君首名、紀夏井、清原元輔、藤原保昌らがいる。特に、良吏として『続日本紀』に詳しい記事が書かれた道君首名や、『後撰和歌集』の撰者で清少納言の父である清原元輔は有名である。道君首名は、池辺寺の龍伝説と関係が深い味生池を作った人物である。清原元輔は女流歌人檜垣と交友があったという説話※もよく知られている。ただし、檜垣伝説には様々な異伝もある。蓮台寺は檜垣ゆかりの寺として知られる。



檜垣塔（蓮台寺）

※ 清原元輔と女流歌人檜垣との交友の説話

肥後国司であった清原元輔が白川のほとりである女に出会い、それがその美貌と文学的才能によって名声を得ていたものの藤原純友の乱（939）によって落ちぶれた檜垣であることに気づいた元輔が、自らの着物を脱いで与えた。その際に、檜垣は「年ふればわが黒髪も白川の みずはくむまで老いにけるかな」と零落した自らの身の上を詠んだと伝わる。室町時代の世阿弥の能『檜垣』により広く知られるようになった。

② 中世

かねてより物資の集積地となっていた川尻は、鎌倉時代以降さらに発展し、海陸の要衝として多数の人々が集まる場であった。大慈寺の開祖である寒巖義尹は、緑川と白川の合流地点で交通の難所となっていた川尻の大渡付近に橋を建設し、より一層川尻の重要性が増した。

南北朝時代は戦乱が続き、熊本もしばしば戦場となった。「隈本城」の名称が文献で確認できるのは14世紀後半からで、南朝側の城だったとみられる。その後、隈本城には出田氏や鹿子木親員（寂心）が入り、鹿子木氏の時代に千葉城（現



鹿子木親員（寂心）

（熊本城顕彰会蔵）

在の熊本城東端)の位置に移ったとされる。鹿子木氏のあとは城氏が隈本城に入ったが、豊臣秀吉の九州出兵で城氏は降伏し、肥後国領主として佐々成政が入城した。佐々氏の入城後まもなく国衆一揆が起こると、佐々氏は責任を問われて切腹し、加藤清正が隈本城へ入城した。

③ 近世

天正16年(1588)に加藤清正が隈本城に入城すると、新城の築城や白川の河川改修、城下町整備を進め、新城完成後の慶長12年(1607)には、「隈本」から「熊本」へ改称した。現在も続く城下町が形作られたのはこの時期からで、新町の短冊形の町割りや古町の碁盤の目状の町割りは、加藤清正の整備によるものと伝わる。



熊本城下絵図



熊本城(南西から)



古町之絵図

(公益財団法人永青文庫 所蔵)

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

加藤清正の跡を継いだ加藤忠広が寛永9年（1632）に改易（所領、役職等を取り上げられること）されると、小倉から細川忠利が入国し初代熊本藩主となった。こののち明治4年（1871）の廃藩置県まで200年以上にわたって細川氏が統治し、^{たいしょう じあと}泰勝寺跡（立田自然公園）や^{みょうげ じあと}妙解寺跡（北岡自然公園）、^{すい}水前寺成趣園など、細川氏ゆかりの多くの史跡が残り、現在も市民に親しまれている。

藩政の整備とともに藩の物流システムも整備された。近世の川尻には、^{あき}飽田・^た託麻・^{たくま かみましき}上益城・^{しもましき}下益城・^{うと}宇土から、最盛期には20万俵に及ぶ米が集められ、ここから大坂の蔵屋敷へ運んで売却し、藩の貴重な財源となっていた。当時の米蔵2棟が現存するとともに、御船着場や御船手渡し場も残っており、^{おふなてわた}当時の港町の機能をうかがうことができる全国的にも珍しい例となっている。



18世紀ごろの熊本

④ 近代

明治4年(1871)の廃藩置県により、肥後国は熊本・人吉の二県となったが、同年11月には熊本県が二分されて熊本・八代の二県となり、翌年6月には熊本県が白川県と改称された。さらに明治6年(1873)1月には八代県が廃止され白川県に併合、明治9年(1876)2月に白川県から熊本県へ改称した。

城の役割も変化し、古城地区には医学
校・洋学校が置かれたが、明治6年(1873)
に鎮台(陸軍)本営が熊本城に置かれたあ
と、旧城域は次第に鎮台(陸軍)用地とな
った。明治9年(1876)の神風連の変では、
熊本城二の丸などに建築されていた鎮台
(陸軍)の兵営が神風連によって襲撃さ
れた。翌10年(1877)に西南戦争が発生
すると熊本城は籠城戦の舞台と

なり、開戦直前の火災で天守・本丸御殿などの建造物が焼失した。戦いに際し
城下の大部分も焼失したが、西南戦争終結後、城を中心とした市街地形成を変
えることなく復興が果たされた。

明治20年(1887)には高等中学の一つである第五高等中学校が熊本に置か
れることとなった。中央区黒髪に現存する第五高等中学校本館は、明治22年
(1889)に落成したものである。この学校の教師として小泉八雲や夏目漱石が
赴任しており、小泉八雲が熊本で最初に居住した旧居は市指定文化財となっ
ているほか、夏目漱石の旧居も現存している。

熊本へ鉄道が敷設されたのは明治24年
(1891)のことで、路面電車(現在の市
電)が開業したのは大正13年(1924)で
あった。この年には大正の三大事業と呼
ばれる市電の開通・上水道の敷設・花畑
にあった陸軍関連施設(歩兵23連隊)の
移転がなされ、近代的な都市整備が行わ
れた。



熊本洋学校教師ジェーンズ邸

※平成28年熊本地震により全壊、現在復旧作業中



市電が走る風景(水道町から熊本城)

観条例を熊本市景観条例へ改正し、熊本市景観計画を施行するなど、法に準拠した景観形成の制度へ移行し、景観重要建造物の指定制度を開始している。

また平成24年（2012）に「新町・古町地区の城下町の風情を感じられる町並みづくりガイドライン」、平成27年（2015）に「川尻地区の歴史を活かした町並みづくりガイドライン」を地域と協働で策定し、町並み協定締結の支援や、保存・修景に対する助成を行うなど、市民と一体となって良好な景観の形成に向けた取組を進めている。



町並みづくりガイドラインに基づく修景イメージ

こうした取組を進めていたなか、熊本地震により、指定・未指定問わず多くの歴史的建造物が被災した。熊本県による「平成28年熊本地震被災文化財等復旧復興事業補助金」や、復興基金を用いた「熊本市町並み復旧保存支援事業」などの制度を創設し、歴史的建造物の復旧を支援しているところである。

(2) 関りのある人物

かんがんぎいん
寒巖義尹

建保5年(1217)～正安2年(1300)

寒巖義尹は順徳天皇(一説には後鳥羽天皇)の皇子であったといわれる。はじめ天台宗を学ぶが、後に曹洞宗の開祖である道元に師事し、修行のため2度にわたって宋(中国)に渡った。

帰国後に肥後に移った寒巖義尹は架橋や干拓、荒野の開発などの社会事業に尽力し、当時白川と緑川が合流し、九州第一の難所とされていた河尻大渡に架橋計画を立て、弘安元年(1278)に長さが150mとされる大渡橋を竣工した。また、弘安6年(1283)には大慈寺を開創し、九州における曹洞宗の基盤を築いた。



寒巖義尹

かとう きよまさ
加藤 清正

永禄5年(1562)～慶長16年(1611)

安土・桃山・江戸初期の武将。永禄5年(1562)に尾張(愛知県)の中村で加藤清忠・伊都の子として生まれ、幼少のころから秀吉に仕えていた。

天正16年(1588)に27歳にして肥後北半国の大名となると、旧隈本城を居城地を選び、慶長6年(1601)から熊本城の築城を始めた。築城が完成した慶長12年(1607)に「隈本」を「熊本」に改名したとされる。

清正の代表的な土木事業に白川・坪井川の付け替え・分流がある。清正は城下町を白川の洪水から守るために、白川と坪井川を別々の川とする治水事業を行った。現在の代継橋付近と長六橋付近で白川を遮断し、このあいだを掘りきって直通させた。そして北の屈曲部に流入していた坪井川を旧白川へ通して熊本城のある茶臼山の南側へ流入させ、新川を掘って井芹川に合流させた。これにより白川は城の外堀に、坪井川は内堀となり、2つの川に挟まれた地域のうち山崎地域および高田原地域に武家屋敷を建設し、坪井川両岸の商人町を拡大させた。



加藤 清正

また、井芹川は下流の二本木付近で白川と合流していたものを石塘（背割堤）を築いて分離させ、新たな坪井川として河口まで一本の川に繋げた。井芹川との合流で水勢を増した新しい坪井川は、城下町の舟運路として重要な役割を果たした。

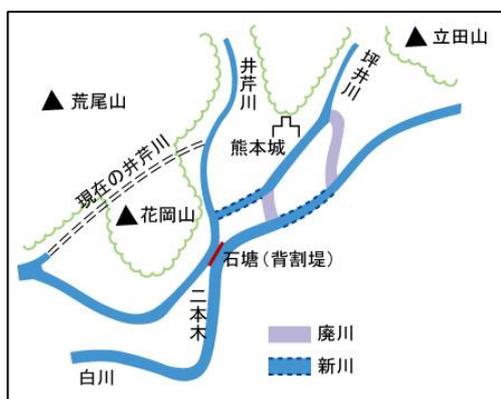


図 白川改修後のイメージ（慶長～寛永

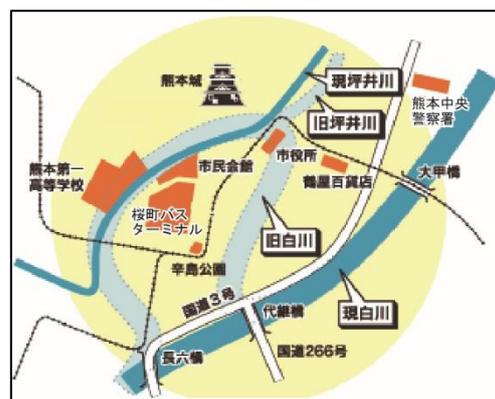


図 白川（城下部）の旧新図

ほそかわ たたとし
細川 忠利

天正 14 年（1586）～寛永 18 年（1641）

初代熊本藩主。豊前小倉城の城主だった細川忠利は、寛永 9 年（1632）に將軍家光により肥後 54 万石が与えられた。加藤家が改易されたあと、細川忠利は加藤清正の統治を尊重し、加藤家家臣や肥後国人を多く召抱えたと伝わる。

細川家は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた大名家であり、細川忠利の祖父である藤孝（幽斎）は、文化人として名を馳せ、父の忠興も利休七哲の一人に数えられるほどの茶人であった。その血筋を受け継いだ忠利も文武ともにすぐれた才能をもっていたとされる。



細川 忠利

みやもと むさし
宮本 武蔵

天正12年（1584）～正保2年（1645）

江戸時代初期の剣術家であり兵法家。武蔵が熊本を訪れたのは57歳のときであり、初代熊本藩主細川忠利に軍事顧問の客分として招かれた。十七人扶持三百石が支給され、熊本城の東にある千葉城跡に屋敷が与えられたと伝わる。以後約5年間を熊本で過ごし、「五里んのしょ どりょうどう」「兵法三十五ヶ条」を著した。また、水墨画、書画、彫刻などでも、すぐれた作品を残した。



宮本 武蔵

ほそかわ しげかた
細川 重賢

享保5年（1720）～天明5年（1785）

第6代熊本藩主。当時熊本藩は財政難に陥っていたため、重賢は藩主に就任後、綱紀肅正（政治のあり方や、それにたずさわる役人の態度を正すこと）を図るとともに、産業振興（新しい産業を作り発展させる）や、藩校「時習館」・医学校「再春館」・薬園「蕃滋園」を設置し、そのすぐれた政治手腕から「肥後の鳳凰」と称された。



細川 重賢

よこい しょうなん
横井 小楠

文化6年（1809）～明治2年（1869）

幕末から明治初めに活動した熊本藩出身の政治家・思想家。横井時存（ときひろ/ときあり）とも呼ばれている。熊本藩の藩政改革を試みたが失敗し、その後、幕末四賢候*の一人である、福井藩の松平春嶽に招かれて政治顧問となり、幕政改革や公武合体の推進に尽力した。その実力が評価され、明治維新後に新政府に参与として出仕した。



横井 小楠

*幕末に活躍した4人（松平春嶽、山内豊信、島津斉彬、伊達宗城）の大名をいう。

こいづみ やくも
小泉 八雲(本名：ラフカディオ・ハーン)

嘉永3年(1850)～明治37年(1904)

明治時代の随筆家、小説家。明治24年(1891)11月、熊本大学の前身である旧第五高等中学校(略称「五高」)の英語教師として、島根の松江中学校から赴任し、明治27年(1894)10月までの3年間を熊本で暮らした。

来日してから14年間に多くの本を海外で出版しており、日本を世界に紹介した「知られぬ日本の面影」、「東の国から」などの著書は、熊本での生活から生み出されたものである。



なつめ そうせき
夏目 漱石

慶応3年(1867)～大正5年(1916)

夏目漱石は明治29年(1896)4月、五高の英語教師として愛媛県松山市から熊本に赴任し、明治33年(1900)7月までの4年3か月間、熊本に滞在した。熊本では新婚生活や長女の誕生など人生の節目を迎えた。また、6回の転居を繰り返し、5度目の住居となる「夏目漱石内坪井旧居」では、最も長い1年8か月を過ごした。

滞在中に本格的な小説は書いていないが、後に発表する『草枕』や『二百十日』は熊本での経験をベースに書かれている。また、漱石が生涯詠んだ句約2600(出典「漱石俳句集」1990年、岩波書店)の約4割が熊本で詠まれ、秀句のほとんどが熊本時代のものであった。(出典「漱石くまもとの句200選」2016年、熊本日日新聞社)



夏目 漱石

4. 文化財等の分布状況

本市には、令和3年(2021)2月現在、244件の国指定、県指定、市指定の文化財がある。また27件が国の登録有形文化財として登録されている。

文化財の種類と熊本市内の指定・登録数(件)

	有形文化財								無形文化財	民俗文化財		記念物			計
	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡	古文書	考古資料	歴史資料		民俗文化財 有形の	民俗文化財 無形の	遺跡	名勝地	地質・ 動植物、 植物、 動物、 植物、	
国指定	5	0	3	4	2	2	2	1	0	0	0	11 (1)	【1 】	7 (1)	38 (2)
県指定	11	6	4	29	20	2	2	1	2	1	1	9	1	2	91
市指定	30	3	13	4	2	1	2	7	1	1	11	33	1	6	115
国登録	27	0	0	0	0	0	0	0	-	0	-	0	0	0	27
計	73	9	20	37	24	5	6	9	3	2	12	53	3	15	271

※国指定のうち()は特別史跡及び特別天然記念物の数
※国指定の名勝地【 】は史跡と重複している。

(1) 国指定文化財

六殿神社楼門ろくでんじんじやうもん(重要文化財 建造物)

六殿神社は熊本市南縁にある雁回山がんかいざんの東北麓に位置している。現在、本殿、拝殿、楼門、鳥居などが存在するが、楼門は天文18年(1549)に宇土城主名和顕忠なわあきただが建立したといわれている。和様の社寺建築で、木割きわりが小さく繊細な感じは室町時代の特徴を感じさせる。



六殿神社楼門

熊本城くまもとじょう(重要文化財 建造物)

熊本城は、江戸時代には櫓49、櫓門18、城門29があったと伝えられるが、明治維新後の払い下げや明治10年(1877)の西南戦争開戦直前の火災などで、現存する建造物は13棟である。熊本城の建造物は昭和8年(1993)に国宝に指定され、文化財保護法の制定後は重要文化財に改称された。現存する13棟のうち長堀以外の12棟



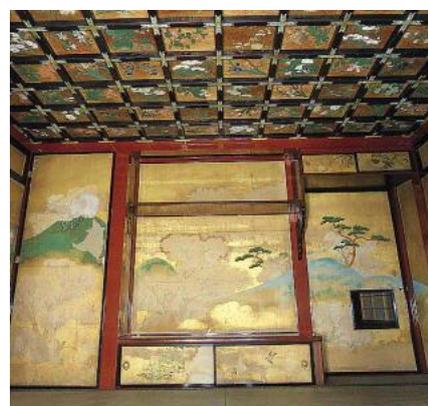
熊本城

が櫓である。

中でも3層5階、地下1階の宇土櫓は築城当初から現存する唯一の多重櫓で、構造も天守に相当する特徴をもつ。天守台東側の東竹の丸には、五間櫓・北十八間櫓・東十八間櫓・源之進櫓・四間櫓・七間櫓・十四間櫓・田子櫓・平櫓が集中しており、二の丸には監物櫓（新堀櫓）が残っていたが、平成28年（2016）熊本地震の影響により、全ての櫓が被害を受け現在復旧中である。なお、長堀については令和3年（2021）1月に復旧が完了した。

細川家舟屋形（重要文化財 建造物）

熊本藩主細川氏が参勤交代のとき使用した御座船「波奈之丸」の、藩主の居間部分。波奈之丸ははじめ細川忠興が豊前中津に在城したころにつくられ、以後何度か造り替えられ、現存するものは第6代目で天保10年（1839）に建造されたものである。明治4年（1871）の廃藩置県後廃船となった。その後、藩主の居間部分だけが保存され、数度の変遷を経て昭和38年（1963）に再建し、熊本城の天守閣内に展示された。平成28年（2016）熊本地震後に解体移築され、現在は熊本博物館に展示されている。



細川家舟屋形

舟屋形は一重二階で、一階は主室と次の間に分れ主室は畳敷き、二階は板敷き一室である。一階の壁面は大和絵の山水、格天井には植物が描かれ華麗な装飾となっている。

旧第五高等中学校 本館 化学実験場 表門（重要文化財 建造物）

明治19年（1886）の中学校令によって、全国を5区に分割して各区に高等中学校を設けることが決まった。明治20年（1887）に第五区の九州は熊本に高等中学校が設置されることが決まり、古城町の仮校舎で第1回目の入学式が挙行された。明治21年（1888）年には第五高等中学校と称することになり、黒髪 of 校舎建設が始まった。設計は文部省の技師山口半六と久留



旧第五高等中学校 本館

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

^{まさみち}正道で、明治22年（1889）に本館と化学実験場・表門が竣工した。

本館と化学実験場は赤煉瓦に白い切石積み
の帯の対比が鮮明である。また表門も門柱に白
い切石積み^{くりいし}の帯を5段に入れ、建物と意匠を揃
えている。基礎工事は白川の栗石^{くりいし}を九尺の深さ
に埋め込んだ入念なもので、建物完成直前の明
治22年（1889）の熊本大地震でも本館はびくと
もしなかったという。平成5年（1993）から本
館は五高記念館として公開されていた。しかし、平成28年（2016）熊本地震で
は、本館、化学実験場、表門のすべてが被災したため、復旧工事が続いている。



旧第五高等学校 表門

熊本大学工学部（旧熊本高等工業学校）旧機械実験工場（重要文化財 建造物）

第五高等学校は高等学校令施行に伴い、明
治27年（1894）に第五高等学校と改称した。熊
本高等工業学校は、第五高等学校工学部から明
治39年（1906）に独立したものである。その際、
学校全体の設計を文部省の^{ぎておたじろき}技手太田治郎吉ほ
か数名が行い、機械実験工場は明治41年（1908）
に竣工した。



熊本大学工学部旧機械実験工場

機械実験工場は装飾的要素を抑えて工場建築としての実用性を追求すると
ともに、全体として整った美しさを見せる。高等工学教育黎明期の建造物と工
作機械等が良好に保存されている点も非常に貴重である。しかし平成28年
（2016）熊本地震により被災し、現在復旧工事を実施している。

^{ともえら でんくら}巴螺鈿鞍（重要文化財 工芸品）

全体に黒漆塗で仕上げられ、薄い夜光貝を三
巴の文様に切り取り張り付ける「螺鈿」の技法
で装飾された鞍である。巴紋は平安から鎌倉時
代に好んで用いられた文様の1つであり、頭の
ふくらみが少なく、また尾が極端に長い形をな
す本作の巴紋は形式も古式である。鞍の形状に
ついて、^{まえわ}前輪の山形がやや直線的であり、^{しず}後
輪の湾曲が深く、^{いぎ}居木幅が広く、「海」「磯」と呼ばれる段差を設けるなど平
安時代末期から鎌倉時代初期にかけての鞍の特徴を有している。



巴螺鈿鞍

梵鐘（重要文化財 工芸品）

大慈寺の開祖の寒巖義尹かんがんぎいんが弘安10年（1287）に作成した梵鐘である。乳の間に3段12列、36個の乳がある。池の間の4面に記された銘文は文章、筆跡共に義尹自身のものである。銘文は鑄造経過とその功德を記したあとに、協力者数、工人名、鐘の法量、経費などを刻んでいる。また、撞座は2個あり、中央に寺の名前でもある「大慈」の2文字が陽刻されている。



梵鐘



銘文

熊本城跡（特別史跡）

加藤清正が茶臼山全体をつかって築城した近世城郭であり、旧城域は周囲 5.3 km・面積 98 ha に及ぶ。現在、宇土櫓をはじめとする 13 棟の建造物が国の重要文化財に、57.8 ha が特別史跡に指定されている。

加藤清正は慶長4年（1599）ごろから築城をはじめたとみられ、慶長12年には完成したと伝わる。加藤家改易後は細川家が入城し、明治時代になるまで使われ続けた。明治時代に鎮台（陸軍）本営が置かれ、昭和20年（1945）まで陸軍用地として使われた。かつての城域が軍用地となって土地の散逸が防がれたこともあり、現在も旧城域が良好に残されている。熊本城跡は、昭和8年（1933）に石垣部分が国の史跡となり残存していた建造物が国宝に指定された。昭和25年（1950）には文化財保護法により国宝の建造物が重要文化財に改称となり、昭和30年（1955）には史跡から特別史跡となった。平成28年（2016）に発生した熊本地震では、石垣全体の約3割に崩落や緩みの被害があり、復旧工事が進められている。



熊本城跡（特別史跡）

熊本藩主細川家墓所（史跡）

（泰勝寺跡）

初代熊本藩主細川忠利が寛永14年（1637）に熊本城近郊の下立田に泰勝院を建立して、祖父藤孝夫妻と母玉子の廟所としたのがはじまり。

寛永19年（1642）に次の藩主^{みつなお}光尚が京都の妙心寺から^{たいえん おしろう}大淵和尚を招いて住職とした。正保2年

（1645）忠興が亡くなると、光尚は泰勝院を瑞雲山^{うんざん}泰勝寺と改め、忠興も玉子の隣に葬られた。

明治維新の際の神仏分離令によって泰勝寺は廃寺となり、寺跡は細川家の立田別邸となったが、昭和30年（1955）以降一部が細川家から熊本市に貸与され、立田自然公園として一般に公開している。敷地は旧寺域の墓地と庭園から成り、旧寺域は立田^{しどう}祠堂を含む細川邸、墓地は四^{ごびょう なりしげ なりたつ よしくに もりひさ}つ御廟と^{たかあん}斎茲・^{けいしつそうえい}斎樹・韶邦・護久やその子女の墓があり、庭園には旧蓮池と苔庭、茶室・仰松軒などがある。

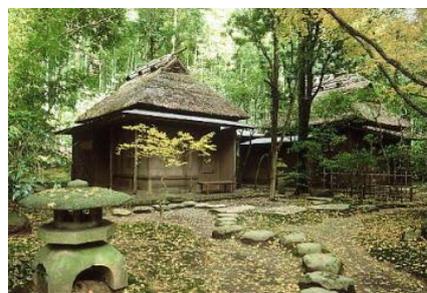
（妙解寺跡）

細川忠利が亡くなったあと、第2代目藩主の光尚が祇園山（現花岡山）の麓に建立したもので、寛永19年（1642）に完成した。翌寛永20年

（1643）東福寺の^{たくあん}沢庵禅師の同門、^{けいしつそうえい}啓室宗栄が下向して住職となり、護国山妙解寺となった。寺号は忠利の戒名の妙解院に基づいている。以後歴代の菩提寺とされ寺領300石となり、幕末までに10代の住職が務めた。明治2年（1869）、神仏分離に伴い廃寺となり、細川邸となった。その後、昭和20年（1945）7月3日の空襲で別邸は焼失し、昭和30年（1955）に熊本市が一部を譲り受け、北岡自然公園として一般公開している。現在も妙解寺橋・正門・庭園・参道の石灯籠群・築地^{ついで}塀などが残り、歴史を物語っている。



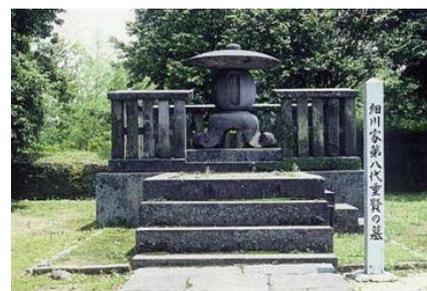
四つ御廟



茶室 仰松軒



細川家霊廟

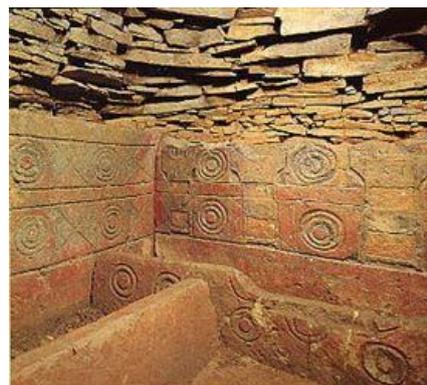


細川家第八代重賢の墓

千金甲古墳（甲・乙号）（史跡）

（甲号）

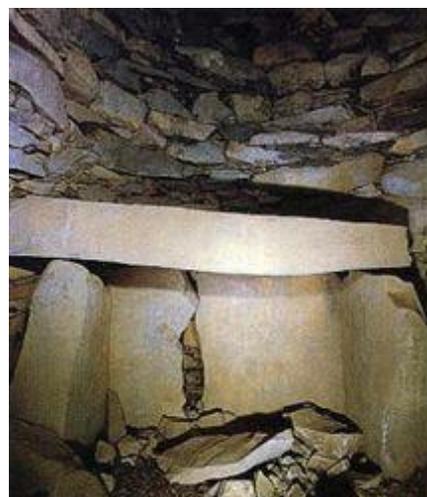
金峰山の外輪山の1つで、白川河口にほど近い^{ごんげんやま}権現山の中腹に千金甲古墳の甲号（千金甲1号墳）がある。円墳と思われるが、正確な墳丘の形や大きさは明らかになっていない。海拔は約100mで、眼下には熊本平野を一望する素晴らしい光景が広がる。最も特徴的なのは内部に造られた^{せきしつ}石室で、内壁に同心円と対角線、^{ゆき}靱等の文様を立体的に刻み、赤・青・黄の三色で彩色した装飾古墳である。靱とは、背中に背負って矢を入れる容器のことをいう。石室の天井は一部壊されているが、熊本によく見られるドーム状に割石を積み上げた美しい天井である。石室の入口は墳丘の西側に延びている。5世紀の築造と推定されており、多彩色の装飾古墳としては古いものである。



千金甲古墳（甲号）

（乙号）

甲号から南に下った海拔約50mのところ、権現山と高城山の鞍部にあるのが乙号（千金甲3号墳）である。こちらも円墳と思われるが、甲号と同様に正確な墳丘の形や大きさは明らかになっていない。内部の石室には巨大な^{いしやかた}石屋形が設けられており、これは甲号には見られない特徴である。石屋形とは石室内の死者が眠る場所に造られた覆屋のことで、乙号のものは巨大な石材を組み合わせて造られている。乙号はこの石屋形に同心円や弓、靱、舟、大刀といった装飾が、繊細な線で描かれている装飾古墳である。



千金甲古墳（乙号）

色は剥落により分かりづらいが、赤や緑が塗られていることが確認されている。入口は甲号と同じ西側に延びている。築造は6世紀と推定されている。

釜尾古墳（史跡）

釜尾古墳は、金峰山の外輪山である釜尾山から北東方向に延びた丘陵の端部に位置している。丘陵下には井芹川が蛇行しながら南流している。海拔は約65mで、井芹川との比高差は約50mである。墳丘は削り取られているため、現状では径14m程の円形であるが、平成2年（1990）の発掘調査等によって、本来は径が30mを超える大きな円墳であったことが判明している。6世紀の築造と考えられている。

釜尾古墳も装飾古墳として有名で、内部の石室の壁が赤と白で塗り分けられている。石室内には石屋形があり、バラバラになっていて本来の形から崩れているものの、その石材等に赤、青（灰）、白の3色で同心円や三角、そうきやくりんじょう双脚輪状文もんと呼ばれる脚の生えたとげとげの文様が描かれる。双脚輪状文は、全国でも数例しか見つかっていない非常に貴重な文様である。

しかし、平成28年（2016）熊本地震で大きく被災し、現在は繊細な装飾を劣化させずに修復させる方法を検討しているところである。



釜尾古墳（外観）



釜尾古墳（内部）



双脚輪状文

塚原古墳群（史跡）

4世紀～6世紀に造られた塚原古墳群は、これまで未調査のものも合わせると総数500基にのぼるのともいわれる、熊本を代表する大規模な古墳群である。この古墳群の大きな特徴は前方後円墳、円墳、方形周溝墓、墳丘のない墓といった多彩な墳墓が造られていることで、これは葬られた人々に様々な身分が



塚原古墳群

あったことを示すと考えられる。墳墓の形態だけでなく、内部の埋葬施設も横穴式石室、家形石棺、箱式石棺、木棺、石蓋土坑など多種にわたっている。装飾古墳として知られる石之室古墳は、埋葬施設が横口を取り付けた家形石棺という特徴的なもので、内側に斜格子の文様等を繊細に刻み付けている。また、塚原古墳群では百済や伽耶との関係を示す土器等が出土していることも非常に注目される。

塚原古墳群の地下には九州自動車道が延びているが、これは九州道建設時に最新の工法を用いて高速道路事業と文化財保護を両立させたもので、背景には官民を挙げた塚原古墳群の保存運動があった。現在は古墳公園として整備され市民の憩いの場になっているが、平成28年（2016）熊本地震で石之室古墳をはじめとした複数の古墳が被災し、復旧事業を行っている。

熊本藩川尻米蔵跡（史跡）

中世から重要な港であった川尻は、江戸時代にさらに発展し五か町の1つとなった。川尻の御蔵には熊本藩内の5郡から年貢米が集められ、さらに米市場で販売するため大坂への積み出しも行われた。

川尻の御蔵には20万俵の年貢米が収められていたという記録もある。現在も米蔵と船着場、御船手渡し場が残っている。



熊本藩川尻米蔵跡

西南戦争遺跡（史跡）

西南戦争は明治10年（1877）に南九州一帯で起こった国内最大最後の内戦である。政府軍と薩摩軍は各地で戦闘を繰り広げたが、物量に勝る政府軍が次第に優勢となり、西郷隆盛が鹿児島島の城山で自刃して戦争は終結した。



西南戦争遺跡

第1章 熊本市の歴史的風致の背景

西南戦争遺跡は、田原坂、半高山^{はんこやま}等の古戦場をはじめ、台場、本営、救護所、墓地などを含む多種多様な要素からなる遺跡である。戦争が約7ヶ月に及び、かつ戦場が南九州各地（熊本、大分、宮崎、鹿児島）に及んだことから、関係遺跡が広域に分布している。

平成25年（2013）3月、本市にある田原坂本道（熊本市指定有形文化財豊岡の眼鏡橋の路面を含む）及び田原坂公園並びに玉名郡玉東町にある二俣瓜生田官軍砲台跡、二俣古閑官軍砲台跡、横平山戦跡、半高山・吉次峠^{きちじとうげ}戦跡、正念寺山門、高月官軍墓地及び宇蘇浦官軍墓地が国指定の史跡となった。両市町の西南戦争遺跡は、良好に残存し極めて貴重であり、わが国の政治・軍事を知るうえで重要である。



西南戦争遺跡の出土品

下田のイチョウ（天然記念物）

南区城南町^{じょうなんまち}の中央部に所在する県下最大級を誇る大イチョウで、下田家の屋敷内にあったことからこの名で呼ばれる。根回り10.2m、幹回り（目通り）9.0m、高さ22.0m、枝張り東西14.8m、南北15.2mを計る。地上1.5mの高さから大きな幹が分かれており、南の幹周り5.9m、北の幹周り6.4mで幹の途中からこぶが垂れ下がっている。



下田のイチョウ

天正15年（1587）4月18日には隈庄城^{くまのしょうじょう}に宿泊した豊臣秀吉が翌朝見物に訪れたという伝承が残っている。

(2) 県指定文化財

旧細川刑部邸（重要文化財 建造物）

初代熊本藩主細川忠利の弟、細川刑部少輔興孝を祖とする細川家御一門細川刑部家の屋敷である。刑部家は熊本城二の丸に本邸を置いていたが、興孝が延宝6年(1678)に子飼に別邸を建てて移り住んだため、これを御茶屋と称し、やがて刑部家の下屋敷となった。その後、明治6年(1873)に城内の本邸を熊本鎮台に接收された刑部家は、子飼邸を増改築して本邸とし、移り住んだ。この子飼の本邸が熊本県指定重要文化財に指定された旧細川刑部邸である。建坪約300坪の旧邸の中心は玄関・表客間・書院・春松閣で、それに茶室観川亭・長屋門・蔵・台所などが付属し、大名屋敷の形式を整えている。



旧細川刑部邸

平成5年(1993)に子飼から熊本城三の丸に移築復元し、一般公開されているが、現在、熊本地震の影響を受けて休館中である。

紙本著色宮本武蔵像（重要文化財 絵画）

この資料は武蔵の高弟で、二天一流の正系を継いだ寺尾家に伝来したもので、「武蔵自画像」との伝承もある。現在まで確認されている武蔵像のなかで最も古くかつ優れていて、多くの武蔵画像の手本とされてきた。補筆はほとんど認められず、肖像画で最も重要視される面貌描写は精緻で、的確な朱墨による肉身線と軽いぼかしとが相俟って適度な立体感を表出し、頭髪・眉毛・ひげも細墨線に薄墨を掃いて写実的。唇は伝統的に外側を濃く暈かしをつけ、両端を墨で引き締めている。着衣の輪郭線や衣紋線には、特徴的な打ち込みとしなやかさがみられ、両袖口にも特徴がある。このような様式的特徴から江戸時代前期、狩野派正系の画人による作と考えられる。また、生前の姿は右向きに、没後の姿は左向きに描く頂相（禅僧の肖像画）の様式から、武蔵が向かって左向きに描かれていることからみて、実際には武蔵没の正保2年

紙本著色宮本武蔵像
(島田美術館 所蔵)

(1645) 後に描かれた可能性が高く、17世紀後半と推定される。

こほりりゅうとうすいじゆつ 小堀流踏水術（重要無形文化財）

小堀流踏水術は熊本で発祥し今日まで伝習されている^{ゆうえい}游泳術である。宝永年間（1700年ごろ）^{むらおかい だゆう}村岡伊太夫は白川天神淵で^{およぎ}上士の^{こほりちようじゆん}游の指導にあたり、その子小堀長順は游の初代師範となった。長順は父から受け継いだ游が後世に正しく受け継がれるようにと宝暦6年（1756）「^{けつ}踏水訣」を著わし「^{すい ぼ せんきんへん}水馬千金篇」とともに宝暦8年（1758）に出版した。これらは我が国の水泳書籍としては最初の刊行物とされる。

5代師範^{すいおゆう}小堀水翁は游の名称を確立して、游の心がけと心の修養を「水学行動」の10ヶ条で^{あら}著わした。明治維新後は、東京学習院や京都、長崎にも伝えられ現在も行われている。



小堀流踏水術

だいじじ 大慈寺境内（史跡）

大慈寺は地頭の河尻泰明が弘安5年（1282）年に寄進した伽藍地に、寒巖義尹によって弘安6年（1283）に創建された曹洞宗の寺院である。かつては寒巖義尹を祖とする寒巖派（法皇派）の本山とも称され、曹洞宗寺院で有数の^{めいさつ}名利として知られる。度重なる火災に見舞われ荒廃したが、ようやく昭和60年（1985）に再建され旧態に近くなった。4町あったとされる伽藍地は河川改修その他で狭められたが、鎌倉期からの寺地をとどめている。

また、大慈寺は多くの指定文化財を有しており、国指定の重要文化財^{しほんぼくしよ}梵鐘や紙本墨書^{かんがんぎいんもんじよ}寒巖義尹文書、県指定史跡に指定された境内のほか、本尊の木造^{もくぞう}釈迦如来坐像をはじめとした^{か によらい ざぞう}県指定重要文化財を7件有している。



大慈寺境内



木造釈迦如来座像及び両脇侍立像

雲巖^{うんがんぜんじ}禅寺境内（史跡及び名勝）

古くから岩戸観音として知られた由緒ある霊場で景勝の地である。既に平安時代のころ、雲巖洞には石体四面の観音が祀られて人々の尊崇の対象であったことは、清原元輔や檜垣の伝承によって知ることができる。雲巖禅寺が創設されたのは南北朝のころで、開山は元僧^{とう}東陵^{りょうえいよ}永瑠である。室町時代には衰退したが、加藤家・細川家の庇護によって江戸時代には再び整備の手が加えられた。細川家の重臣^{さわむらだいがく}沢村大学^{のすけよししげ}助吉重が深く信仰し、宮本武蔵も雲巖洞に籠って「五輪書」を著したことはよく知られている。宝永5年（1708）にできた釈迦三尊と十六羅漢の石像、さらに安永8年（1779）から24年かかって奉納された五百羅漢も有名である。



雲巖禅寺境内

寂心^{じゃくしん}さんの樟^{くす}（天然記念物）

熊本市北区の北迫^{きたさこ}集落の北側にあるクスノキの巨木である。幹回り13.5m、樹高約29m、枝張りは東西47m、南北49mにもなる。樹根は大きく盛り上がり、蛸の足のように地上に這いまわっている。クスノキの多い熊本県下でも最大級の巨木である。樹の呼称の由来は鹿子木寂心の墓石を巻き込み成長していると伝えられているためである。



寂心さんの樟

鹿子木寂心は、旧北部町の楠原^{くすばるじょう}城に本拠を置き、飽田、託磨、山本、玉名郡内の560町を領したとされ、後に隈本城（古城、現在の第一高校の場所）を築き、そこを本拠地とした。

近年樹勢の衰えが見られたが、平成28年（2016）から樹勢回復工事を行い、かつての樹勢を取り戻しつつある。

はらまきおおそでぞえ
腹巻大袖添 (重要文化財 工芸品)

藤崎八幡宮に伝わる中世の貴重な鎧である。胸板・背板には金襴(金糸を用いて柄を出した織物)を張りつけている。胴と草摺(胴から垂れた下半身を守る部分)は、黒漆塗の鉄製や革製の小札を染め革でつなぎ合わせており、胴はその上から一面に大模様の優美な正平革で包まれている。草摺は前後左右の4枚に分かれ、前後の2枚は最下部をさらに2つに割っている。草摺が4枚に分かれるのは大鎧の特徴であるが、胴の開閉部である引き合わせが右脇にあり胴丸鎧の特徴も有している。これらのことから、もともとは大鎧であったものに大幅な補修が加わって現在のような形状となったものと考えられる。藤崎八幡宮への伝来その他については記録が無く不明である。



腹巻大袖添

かちいろおどしぐそく
勝色緋具足 (重要文化財 工芸品)

熊本藩3代藩主細川綱利が藤崎八幡宮に奉納した三斎流の具足である。三斎流とは細川家2代細川忠興が実戦での経験を踏まえて考案したもので、細川家のお家流具足である。特に忠興が関ヶ原の戦いで用いていた「黒糸威横矧二枚胴具足」(熊本県指定重要文化財)は尊ばれ踏襲された。本品は三斎流の形式をとっているが、藩主用の優れた細工が施されている。胴は黒革で包んだ伊豫札縫延胴を、上部を紫色で、長側三段以下草摺までは勝色(黒っぽい濃い藍色)の糸で緋てある。兜の鉢は越中頭形で、茶壺形の吹返しには九曜紋を据え、兜の立物は藩主用の山鳥尾の掴み差し(山鳥の尾羽を無造作に差したもの)である。



勝色緋具足

蝶番の裏側に「元禄弍己巳三月日 春田正嗣」と刻銘があり、元禄2年(1689)に細川綱利が細川家お抱えの甲冑師春田正嗣に作らせて藤崎八幡宮

に奉納したことがわかる。

りょうないめいしょうずかん
領内名勝図巻（重要文化財 歴史資料）

「領内名勝図巻」は、熊本藩の領内を中心に滝や山・海からの眺め、名所等を描いた全14巻からなる風景図で、寛政5年（1793）に完成した。14巻全ての長さを合計すると約400mにも及ぶ壮大な作品である。8代熊本藩主細川^{なりしげ}齊茲が矢部地方での狩りの際、千滝と五老ヶ滝に感動して御抱絵師の矢野良勝に写生を命じ、その出来映えに満足した齊茲が他の大名たちに披露しようと、肥後国中の滝や美しい風景を良勝と衛藤良行に描かせたことが制作のきっかけである。雪舟の技法に習い、大胆な筆使いながら細い部分も極めて写実的に描いており、江戸時代中期の熊本の風景を知る格好の資料となっている。さらに、藩主が他の大名に図巻を披露するために描かせたという史実からも貴重な歴史資料である。



領内名勝図巻
 （公益財団法人永青文庫 所蔵）

(3) 市指定文化財

小泉八雲熊本旧居（有形文化財 建造物）

小泉八雲が熊本に来て最初に住んだ家で、当時は手取本町^{てとりほんちよう}34番地、現在の鶴屋百貨店の東端のところにあり、家主は赤星氏であった。八雲が家主に特に注文し、新調してもらった神棚が現存している。八雲はこの家に1年間住んだのち、外坪井の家に移り、明治27年（1894）に熊本を去った。手取本町のこの旧居は昭和34年（1959）に鶴屋に買収されて解体されることになったが、小泉八雲旧居保存会が結成されて現在地に移転保存された。



小泉八雲熊本旧居

平成5年度（1993）から解体修理を行い、平成7年度に復元された。

豊岡の眼鏡橋（有形文化財 建造物）

豊岡の眼鏡橋は、熊本市北区植木町を流れるこの木葉川支流の中谷川に架かる石造アーチ橋である。両脚の支間は11.2m、高さ4.4m、輪石と輪石を楔石^{くさびいし}で継いだ県内でも数少ない形式の単一アーチ橋である。上流側の要石には架橋に関わった人々の名前が、下流側の要石には架橋年である「享和壬戌二年十月吉日」と刻まれている。享和2年は西暦1802年であり、現存する建築年代が明らかな石造アーチ橋としては県内最古の石橋である。



豊岡の眼鏡橋

尾跡地蔵講帳・恵美須祭礼帳・西之宮講帳（有形文化財 歴史資料）

西区河内町船津尾跡地区が書き綴ってきた3種類の講帳である。地蔵講帳は文化7年（1810）、西之宮講帳は嘉永元年（1848）、恵美須祭礼帳は安政元年（1854）からそれぞれ昭和30年代までの記録帳である。輪番で祭礼をとり行い、各年の祭主が記録したもので、祭礼に関するだけでなく、天候、作柄、事件、物価なども記録されている。村民自らが書いた村の歴史である。



尾跡地蔵講帳・恵美須祭礼帳・西之宮講帳

（尾跡地区所有）

津波供養塔（有形文化財 歴史資料）

寛政4年（1792）4月1日の雲仙岳爆発による眉山の崩壊が引き起こした大津波は有明海沿岸地域に甚大な被害を与えた。この供養塔は翌年4月に造立された宝篋印塔形の供養塔で、願主は坪井町泰陽寺第8世太鈞円忠、石工は対岸の肥前国（現佐賀県）の永石昌豊である。



津波供養塔

津波供養碑（有形文化財 歴史資料）

- ① もとは船津巖島神社東参道にあったものを道路改良により現在地に移した。寛政7年（1795）10月の建立で、4面に渡り被害状況や教訓が刻まれている。
- ② 河内船津町の蓮光寺に立つ、船津、河内、白浜、近津四か村の罹災死者「人数七百六十五人」供養碑で、当時の被害の甚大さを偲ばせるものである。
- ③ 大きな自然石に寛政4年（1792）壬子4月朔日の紀年銘と志主3名の名前が刻まれている。



①



②



③

津波供養碑

富ノ尾古墳（史跡）

植木から熊本城へと南北に延びる京町台地から、西側に派生した丘陵上に富ノ尾古墳がある。直径約15m、高さ約3mの墳丘が残存しているが、正確な墳丘の形や大きさは明らかになっていない。墳丘の内部には、安山岩の割石を積んで造った横穴式石室がある。かつては赤色で円と三角の文様が描かれていたというが、現在は確認できない。石室構造から5世紀に築造されたものと考えられる。



（外観）



（内部）

富ノ尾古墳

この付近には本墳を含めて3基の古墳があったが、2基は破壊されてしまい、そのうちの1基は前方後円墳であったといわれている。また、石人とよばれる石製の人物像がこの3基の古墳のいずれかに伴っていたといわれるが、確証はない。

しじけん 四時軒跡（史跡）

横井小楠の旧居である。嘉永7年（1854）7月に兄時明が病死したので、小楠は思いがけず家督をつぐことになった。彼は横井家の財政を立直すため、在宅願を出して安政2年（1855）に城下の相撲町から沼山津^{ぬやまづ}に移転し、この家を四時軒と名づけ雅号^{がごう}を沼山と称した。その後、安政5年（1859）に福井藩に招聘^{しょうへい}され、文久2年（1862）まで肥後と福井を往復したが、同年12月に刺客事件^{*}が起これ、翌3年（1863）に武士の身分を取り上げられ、沼山津^{ちつきよ}に蟄居させられた。明治元年（1868）に明治政府の参与となったが、翌2年（1869）1月5日に京都で暗殺され、沼山津在住は実質8年8か月であった。

小楠はこの地で家を増築し、私塾を開き多くの門弟を養成した。私塾は明治後期に解体され、住居は明治期の火災で消失したが、建物のうち12坪の残骸が残り、昭和43年（1968）に残存していた旧居四時軒を熊本市有形文化財に指定し、昭和57年（1982）に一部を再建した。



四時軒跡

※小楠が熊本藩江戸留守居役「吉田平之助」の家を訪れていた際に、三人の刺客に襲撃された。小楠は床の間に置いた刀を取ることができず、やむを得ず、福井藩邸へ走って刀を入手し、再び吉田宅を訪れたが、刺客はすでに逃亡していた。友人の吉田は負傷しており、後に死亡した。友人を見捨てて一人逃げたと勘違いされ、武士にあるまじき振る舞い（土道忘却）であるとして非難された。

じんないはいじ 陳内麿寺跡（史跡）

陳内麿寺跡は南区城南町にある寺院遺跡である。出土した瓦から白鳳期^{はくほうき}にさかのぼると見られており、現在明らかになっているなかでは肥後国で最古級の寺院である。昭和32年（1957）、昭和33年（1958）に発掘調査が行われ、法起寺式の伽藍配置が想定されているが、詳しい様相は不明である。

現在、地表には長径1.9m、短径1.8mの大きな塔心礎^{とうしんそ}が残っている。塔心礎とは、塔の心柱を支える台石のことである。

近隣の山手には、陳内麿寺に瓦を供給した陳内瓦窯跡も確認されており、斜面に造られた穴窯が良好な状態で残存している。



陳内麿寺跡

(4) 主な国の登録有形文化財

早野ビル

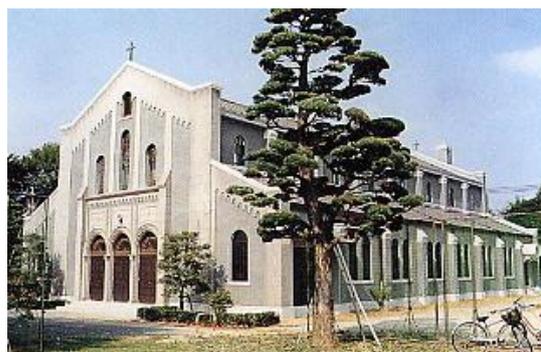
大正13年(1924)に建築された鉄筋コンクリート造りの建造物で、熊本で最初の貸しビルであったと伝えられる。設計は熊本県出身の矢上信次である。2・3階を通した窓廻り、4階及び塔屋の窓廻り、外壁の柱型等に独特の装飾が施されており、この建物の特徴となっている。



早野ビル

九州学院高等学校講堂兼礼拝堂

学校の設立者であるブラウンを記念して大正14年(1925)に建築された。教会と同様、身廊(中央の細長い広間)の両側に側廊を設ける三身廊式の平面を持ち、白い人造石の柱型と黒モルタルの壁を対比させた正面の意匠に特徴がある。設計者は米国人建築家のヴォーリズ。熊本市におけるヴォーリズ設計の建造物は他にも九州女学院高等学校本館や熊本福音ルーテル熊本教会がある。



九州学院高等学校講堂兼礼拝堂

長崎次郎書店

大正13年(1924)に保岡勝也によって外観がデザインされた、木造二階建ての書店である。外壁は煉瓦で固められ、軒の出の小さい屋根、障壁風の壁の上部に設けた小屋根、軒廻りの装飾、2階の連続する変形のアーチ等の特徴がある。書店前を路面電車が行き来する光景は熊本市を代表する景観の1つである。



長崎次郎書店

西村邸（西村家住宅店舗及び主屋）

大正6年（1917）の建築。明八橋側の坪井川沿いにあり、南側の道路に面して店舗が設けられ、北側の坪井川に面して主屋が建てられている。主屋は木造2階建てで住宅内部の床、壁、天井に数寄屋風の意匠が使われている。また元は油商であったためか、敷地東西の境界沿いに設けられた煉瓦造の防火壁に特徴がある。



西村邸

（5）主な未指定文化財

沈目遺跡及び出土石器

本市では東区石の本遺跡や南区城南町の沈目遺跡、北区硯川遺跡などで始良丹沢火山灰（約2万6千年～2万9千年前）の下層から石器が出土しており、これらは後期旧石器時代でも古い段階の資料である。特に沈目遺跡から出土した石器は大振りで加工が大きいなどの特徴を有し、より古い時代の要素を留めている可能性もある。沈目遺跡は熊本市域での人類活動を確認できる最古級の資料であり、熊本の歴史を理解するうえで欠かすことの出来ない遺跡・遺物である。



沈目石器

文安元年の六地藏石幢

中世になると全国的に地藏信仰が盛んになり、そのなかで六角柱の石幢の各面に地藏を彫り込んだ六地藏石幢が成立し、九州を中心に全国に展開する。熊本市域には全国的に見ても特に密集して分布しており、本市を代表する石造物の形態といえる。中でも文安元年（1444）の年号が刻まれたこの六地藏石幢は、年号が明瞭に確認できるもののなかでは県内最古級である。その形態も六地藏石幢成立初期の形態を留



六地藏石幢
（熊本博物館移設後）

めており、総高は約370cmと大型で、龕部の彫刻も良好に残っており、市内の六地藏石幢のなかでも特筆すべきものである。もともとは花園にあったものを熊本城不開門の側に移動していたが、熊本地震により倒壊した。現在は修復のうえ、熊本博物館の敷地内に移設された。

木村家住宅

江戸時代末期の建築（詳細不明）。木村家住宅は、市内で数少ない在郷の武家屋敷であり、同家の先祖は明和7年（1770）に出仕し在御家人となった。細川重賢が再興したいぬおもの犬追物の射場がたむかえ田迎村に移された際に、木村家は藩主の休息所となり、以後、犬追物催し方となったとされる。

建物は、東西に長いが、その西端では南側に座敷を、東端では北側に土間を突出させる、上から見るとZ字型の平面をもつ。屋根は茅葺であるが、下屋には瓦を葺き、当家では、この屋根を「ちょんまげ屋根」と呼ぶ。現在は茅葺の屋根型を象る鉄板葺きとしている。熊本地震で大きな被害を受けたため、現在は復旧工事の最中である。



木村家住宅

吉田松花堂

吉田松花堂は江戸時代より伝統薬「しよ諸毒消丸薬」を製造販売する由緒ある商家である。熊本城の城下町は明治10年（1877）の西南戦争によってほとんどの建物が焼失し、城下町としての景観を失っていた。吉田松花堂も焼失したが、西南戦争直後から建て直され、主屋は明治11年



吉田松花堂

(1878)に竣工し、その後も明治期には書院、茶室などが増築された。

現在、熊本城下町に見られる最大の町家である。道路沿いには長い土塀や格式のある玄関が見られ、西側は町屋、東側は武家屋敷風に作られている。熊本地震で大きな被害を受けたが、復旧工事を終え往時の姿を取り戻している。

しんぷうれん 神風連墓地

熊本市中央区黒髪には、肥後勤王党（尊王攘夷）の育ての親である幕末の思想家林桜園はやしおうえんや肥後勤王党の志士、神風連きんのうどうの変で倒れた人々を祀る桜山神社がある。この神社の正面には志士たちの供養塔123基が整然と並び、奥には林桜園の墓がある。神風連の変は政府に対する反乱と捉えられたため鎮魂の場などが正式に存在しなかったが、肥後勤王党や神風連の遺族によって明治18年（1885）に墓所が整備されるにいたった。なお、大正時代には一部の志士に贈位ぞうい*がなされ、名誉を回復するにいたっている。



神風連墓地

※贈位は、生前に功績を挙げた者に対して、没後に位階を贈る制度であり、熊本の士族太田黒伴雄おおたぐろともお、加屋齋堅かやはいけんに正五位が贈られた。

りゅうふくじ 立福寺の米おし

北区立福寺の上(立福寺は上、下の2地区に分かれる)の氏子約40戸が祭祀する立福寺伊佐那岐神社の祭礼(10月15日)に伴う行事が米おしで、五穀豊穡の感謝を表すものと伝わる。米おしに使用される米は祭りの前日にふかし、注連縄しめなわを張った桶の中に入れる。上半身裸の若者たちが拝殿に集まり、桶を取り囲んでいっせいに桶を引き寄せて中の米を掴んで撒



立福寺の米おし

出典：『北部町史』

き散らす。これを3回繰り返し、最後には桶を高々と押し上げる。米おしのあとには熊本市指定無形民俗文化財にも指定されている立福寺神楽が奉納される。

おあとじゅうぜんじがく
尾跡十禅寺楽

市内周辺には「楽」を奉納する地区が点在する。河内町船津の尾跡地区に約200年前から伝わるとされる「十禅寺楽」は、雨乞い行事の一つとして行われてきた。9月20日前後に行われ、熊本市指定有形文化財尾跡地蔵講帳などで往時の祭りの姿を辿ることができる。かつては、太鼓、笛、三味線に合わせて列をなした踊り手が行進し、行列の中に白狐像が登場するのが特徴で、これは雨を乞う子狐が親狐に会いに行くという説に基づく（白狐像は尾跡公民館に安置されている）。現在は、公民館の白狐像前で奉納している。



尾跡十禅寺楽

出典：『河内町史』

(6) 工芸品、料理等

① 伝統工芸品

肥後象嵌

約400年前、鉄砲の銃身や刀の鍔に象嵌つばを施したことが始まりといわれている。地鉄に、金・銀をはめ込み、さまざまな模様を描き出す。地鉄そのものの美しさを尊重し、派手さを抑えた上品で奥ゆかしい作風が特徴である。現在ではペンダントやネクタイピンなどの装飾品を中心に制作されている。国の伝統工芸品に指定されている。



川尻刃物

川尻刃物は、薩摩の刀工である波平行安なみのひらゆきやすの流れをくむ刀鍛冶が起源とされる。戦前は農機具から荷馬車の部品、刃物など多くの鉄製品を製作していたが、現在では包丁などの刃物が中心となっている。地金と呼ばれる極軟鉄に良質の鋼はがねを挟み込んで手打で鍛え上げる「割込み鍛造」と呼ばれる技法で鍛造された刃物は、炉で1100～1200℃に加熱、鍛接して仕上げられる。



切れ味、耐久性に優れ、重厚な美しさが特徴である。

おばけの金太

おばけの金太は、黒い烏帽子に真っ赤な顔で、紐を引くと目玉がひっくり返り、長い舌をぺろりと出すカラクリ人形である。19世紀の中ごろに人形師西陣屋彦七が考案したカラクリ人形が原型といわれる。金太というのは熊本城築城の際に面白い顔をして人を笑わせる金太という足軽がいたという昔ばなしにちなんだものといわれている。



肥後てまり

江戸時代に城勤めの奥女中たちが作り始めたものが各地の城下町に伝わり、熊本の女性にも代々受け継がれてきた。

へちまを芯に、フランス刺繍の糸で複雑な模様を施している。

昭和43年（1968）肥後てまり同好会ができ、技術が伝承されている。



肥後まり

江戸時代の中ごろ、木綿が庶民の手に入りやすくなると、肥後まりは城下町で盛んに作られるようになり、お正月の玩具やひな祭りの飾りとしてもつかわれた。

もみがらを芯に、天然の植物染料で染めた木綿糸で、13種の伝統の柄を配色の変化を確認しながら作られている。



肥後こま

江戸時代には武家の子弟の遊びであったものが、明治時代になって広く庶民のあいだに広まり、縁起物、土産品としても親しまれてきた。

形は現在12種類もあり、それぞれの形にトンボ、チョンカケ、ヒネリ、ダルマなどの名前がある。肥後こまに塗られている色は、赤は心臓、黄は肝臓、緑は腎臓、黒はすい臓、無色は肺と、身体の五臓を表し、健康長寿への願いが込められている。

また、肥後こまのなかでもチョンカケを回すには技術が必要で、その技術は「肥後ちょんかけ」として熊本市指定無形民俗文化財に指定されており、活動の広がりを見せている。



② 郷土料理・菓子・酒

馬肉料理

熊本県は馬肉の生産量が全国で1位であり、馬肉は熊本の郷土料理に欠かせない食材のひとつである。定番の「馬刺し」以外にも、鍋や寿司、焼き物などと豊富なメニューで提供されている。

また、食べるだけでなく、脂肪からは馬油を生成し、基礎化粧品などに利用されている。



辛子蓮根（辛子レンコン）

茹でた蓮根の穴に辛子味噌を詰め、衣をつけて油で揚げた料理である。

病弱だった初代熊本藩主忠利のために、水前寺の玄宅和尚が料理人たちに滋養強壮に良い料理を考案させて作ったのがはじまりといわれている。また、輪切りにした蓮根の断面が細川家の家紋である九曜紋と似ていたので、門外不出の料理とされたという言い伝えもある。



一文字グルグル（ひともじグルグル）

ひともじ（ネギの一種）をさっと茹でて冷まし、白根を軸にぐるぐると巻きつけたものを酢味噌で食べる料理である。

江戸時代の倹約令がきっかけとなり生まれた料理といわれている。特に酒肴は贅沢品とされていたので、手に入りやすかった身近なひともじを使ったものとして考案されたと考えられる。



だご汁（だごじる・だごじゅる）

“だご”とは熊本弁で“団子”のことである。だご汁は、小麦粉を練った生地を平たい団子状にして、白菜、大根、人参などの季節の野菜や肉類と共に煮立てて味噌や醤油で味を調えた料理である。農作業に忙しい農家の人々が食事の手間と時間を節約でき、気軽に食べられるうえに腹持ちが良いという利点から生まれたとされる。各地方や家庭で独自の具や味付けが施される。



いきなり団子（いきなりだんご）

輪切りにしたサツマイモと餡（小豆あん）を、餅（ねりもち）または小麦粉を練って平たく伸ばした生地で包んで蒸したお菓子。昔から一般家庭でも作られ続けている伝統的なお菓子である。名称の由来は、短時間で「いきなり」作れるという意味と、来客がいきなり来てもいきなり出せる菓子、また「簡単に作れる団子」の意など諸説さまざまある。



赤酒（あかざけ）

濃厚な褐色であることから赤酒と呼ばれる。その製法により^{あくもちざけ}灰持酒とも言われ、もろみを搾る前に「木灰」を入れることが特徴である。熊本の伝統酒であり、熊本藩は赤酒を「御国酒」として保護したために、熊本で酒といえば赤酒であった。しかし、明治維新後は清酒に次第に押され、第二次世界大戦中に赤酒は製造が禁じられ、市場から姿を消した。戦後製造が再開され、現在では正月のお屠蘇や料理酒として、熊本では欠かせないものとなっている。

